「昭和の記憶」ブックレット No 5

季刊 市井（しせい）の昭和史

聴き取り活動の記録

季刊誌発刊の御挨拶

多くの方々からの共感、ご支援をいただきながら、またこうして季刊誌を刊行することができました。皆さまに、心より感謝申し上げます。

今号では、新しく理事として就任してくださった冨田直子さんからの寄稿も掲載いたしました。冨田さんは外資系企業勤務を経て、昨年夏、有限会社ウィルウィンドを設立されました。同社は「後世」をテーマとした事業を展開されており、ＮＰＯ「昭和の記憶」の志に意気投合し、ご協力いただくことになりました。

新潟支部では、地域紙「上越タイムス」において、写真コラムの連載が始まりました。「上越・昭和の記憶」はすでに六回の掲載を数え、多くの好評の声を頂戴しております。

また、経営コンサルタントとして名高い神田昌典さんの主宰する「リビング・ヒストリー」プロジェクトとの協力関係構築も進めることになりました。同団体は、高齢者からの聴き取りをされていますが、若者たちの参加を中心とし、また、経営者や指導者層にある方々を対象とされているのが特徴です。その点、私たちは「市井」を対象としており、同団体とはお互い補完しあうことができ、大きな相乗効果が期待されます。

今後の予定といたしましては、敬老の日（九月十八日）に、北海道根室市で、北方領土元島民の方々からの聴き取りイベントを開催します。元島民の方々の平均年齢は七十四歳。今のうちに記憶を後世に残す必要があります。この事業は、日本財団様のご支援によって実施されます。この場を借りて、お礼申し上げます。

今回も私たちの活動をこうしてご覧いただく機会を得ました。こうした機会を頂戴できますのも、ひとえにＮＰＯ「昭和の記憶」の活動に共感、ご支援してくださる方々のおかげです。今後とも、よろしくお願い申し上げます。

ＮＰＯ「昭和の記憶」代表　盛池 雄歩

目次

季刊誌発刊の御挨拶……2

【聴き取りの記録】

①三ツ木久子さん……6

②松本零士さん……17

③濱　栄子さん……32

④高久　浩さん……98

⑤冨田夏子さん……115

【活動報告・予定】……134

【いにしえ写真館】

札幌駅（北海道札幌市）……138

【書評】

「松本清張と昭和史」保阪正康……142

「地下鉄（メトロ）に乗って」浅田次郎……143

「ALWAYS　三丁目の夕日」……144

編集後記……146

聴き取りの記録①
三ツ木久子さん（86）

三ツ木久子（みつぎ　ひさこ）さんの来し方

大正八（一九一九）年、十二月二十一日、大久野村、現在の西多摩郡日の出町に生まれ、病弱な母親に代わり兄弟の面倒を見る。
その後、阿佐ヶ谷の医院経営のお宅で花嫁修業。後に、和菓子店の息子と結婚。戦争中は、やむなく閉めたものの、戦後は復活、現在に至る。

ご自身「膝が痛くてね」とおっしゃりながらも、病気のご主人を明るく支えている久子さん。老舗の和菓子店を、戦後、新天地でご主人と二人で再興。順風万帆とはいかないことも時にはあったことでしょう。持ち前の明るさと知恵で基盤を築きあげ、現在はその「のれん」を、息子さんがしっかりと受け継ぎ、守っています。（副枝）

蚕ってね、冷たいんです

――お生まれになった「日の出町」はどんなところですか。

三ツ木　今は日の出町ですが、当時は、大久野村字新井と言って、山の近くでしたから、養蚕が盛んでした。私の家も養蚕をしていました。大きな家で二階は蚕室、地下室は桑の葉の貯蔵場所でした。蚕は「濡れた葉を食べさせるとお腹をこわす」と言われていて、収穫した葉は、一旦地下に入れ乾燥させるんです。私も手伝いましたよ。蚕が葉を食べている時って、雨が降ってるような音がするんですよ。蚕は忙しいんですよ。年に三回、春子、夏子、秋子、と言ってね。蚕のことを「お子さま」と言ってましたね。

蚕ってね、冷たいんですよ。それが気持ち悪くて、好きじゃなかったですね。桑の葉を食べている蚕が落ちるので、それを拾う仕事はよくしました。桑の葉も、小さいときは新芽だけを細かく切るんですけれど、だんだんと大きくなるにつれ、葉っぱになって、そのうち枝つきのままやるんですよ。

養蚕
繭をとるために蚕（かいこ）を飼い育てること。

その新井に「アサノセメント」が来て、大きな工場が出来ましてね。村の人たちのほとんどがそこに就職したんです。私の父も勤めていました。アサノが来てからは、小学校が鉄筋の校舎、橋、道路も整備され、村が随分と裕福になりましたね。

――学校を修了した三ツ木さんは、どうなさったんですか？

三ツ木　私の祖母は、私が六年生の時に脳溢血で亡くなりました。その後、母も肋膜を患ったりと体が弱かったものですから、私が主婦がわりをしていました。妹たちも大きくなり、面倒をみなくてもよくなったので、東京の叔母が、行儀見習いができる所を探してくれたんです。

紀元二六〇〇年のお祝いに撮影

仲良し三人組、そして慰問袋

――それは何年ぐらいですか？

三ツ木　紀元二六〇〇年のお祝いの時ですから、昭和十五年でしょうか。この頃は、まだ戦争は勝っていたんですよね。「凱旋軍人お迎え」といってね、兵隊さんたちを駅に迎えにいきましたよ。旗立ててね。いばって帰ってきましたよ。

阿佐ヶ谷の内科の医院で行儀見習いさせてくれるというので、私はそこにお世話になりました。その医院は、先生と奥様のほかに、看護婦さんと職員さん、女中さんと四人ほどいましたかね。医院を手伝いながら、お茶、お花、料理と交代で習いに行きました。私とあまり年の変わらない看護婦さん二人と、私の三人がとても仲良くなって楽しかったですね。三人でよく行動を共にしました。

興亜奉公日というのがあって、毎月十五日は、朝早く起きて近くの神社にお参りに行ってから仕事をしました。お小遣いを貯めては、三人で相談して慰問袋を作り、手紙を中に入れて、海軍省や陸軍省に持って行きましたよ。随分作りましたが、その中で三人の兵隊さんからお手紙いただきました。

三人連名で出した慰問袋は、満州の少年飛行兵の方からお返事をいただき、もう一つは、北支の部隊からで、「慰問袋をいただきありがとうございました。銃後の勤めを果たしてください」と。立派

二六〇〇年の奉祝
明治五年以降、日本では西暦ではなく「皇紀」を使用しており、皇紀とは神武天皇の即位（西暦紀元前六六〇年）から数え始めた紀年法のことで、紀元とも言われた。
長引く戦争で国民生活が悪化し始めた昭和十五年は、紀元（皇紀）二六〇〇年ということで、日本の国体を盛り上げるため、数々の行事が、各地でとり行われた。

な字で「やまぐちよしはる」と書いてありました。三人で返事を書いたんですが、もう来ませんでした。

もう一人は、私個人が出した分で、とっても分厚いお手紙でした。陸軍軍曹とありまして、「前線で戦友を亡くし、悲しんで原隊に戻ってきたら、あなたからの慰問袋が来ており、涙が出るほど嬉しかった。またこれから前線に出ます。命があったならまたお手紙書きます」と。「どんな人だろうね」と噂しながらすぐに返事を書いたんですよ。新聞や、今の週刊誌みたいなニュースばっかり載っているものを入れてね。これで国内の様子がわかると思って。それから三ヵ月後にまた返事が来たんですよ。何回か手紙のやりとりをしました。「私はこういう者です。できたら写真を送ってください」って写真が送られてきましたよ。「北支から中支、南京攻略に参加しました。今度も命が助かりました。命長らえて母国の土を踏むことが出来たなら、一番にお目にかかりたいと思います」なんて書いてありました。その頃の新聞には、〇〇部隊凱旋、△△部隊凱旋って、毎日出るんですよ。

銃後の勤め
戦地の兵士などを慰めるために、日用品や手紙を入れて送った袋。

興亜奉公日
国民精神総動員運動の一環として実施された生活規制。一九三九年（昭和十四）九月一日から毎月一日をあて、料理飲食店での飲酒を禁止するなどした。

慰問袋
戦地の兵士などを慰めるために、日用品や手紙を入れて送った袋。

しばらく、手紙が来なくなっていたので前線にいるんだわね、なんて話していたら、新聞にその人の部隊が帰ってくると出ていたんです。そしたら、ある日、その兵隊さんが病院に現れたんですよ。本人が。いろいろとお礼を言われましてね。その時は、玄関でお話しただけですぐに帰られたんです。それから近衛歩兵第一連隊というところからお手紙をいただいて、兵隊さんの実家は、西多摩郡で私の実家の隣の隣町だったんですね。「まあ、近くだわ」ということでね。三月十日の陸軍記念日は、全員休日で出られることになったから、もしあなたが出られるなら会いませんか。新宿の伊勢丹の角で軍服を着て待っています、という葉書が来たんです。先生に言って、お暇をいただいて行ったんですよ。

私は、男の人と一度も歩いたことなくて、怖いような、ドキドキするようなそんな気持ちでした。兵隊さんは、私よりずっと年上で、老けた感じでしたね。その方はね、「現役で二年間歩兵隊で勤めて、除隊というときに召集されて、そのまま帰れず、中支でさんざん働いて、今度は前線に出されて六、七年になります。軍隊ですっかり

北支
華北のこと。中国中北部、黄河の中・下流域の地方。河北・山西・山東・河南の四省にわたる地域。

中支
華中のこと。中国中東部、揚子江の中・下流域の地方。湖南・湖北・江西省の地方で、穀倉地帯を指す。

陸軍記念日
日露戦争における奉天会戦の勝利を記念して設けられた記念日。三月十日。

産業戦士
戦時下、労働者は「産業戦士」と呼ばれ戦争を支える存在とされた。

病院の医局にて

年をとりました」っておっしゃっていました。大変なご奉公だったんですよねー。

――それで、その方とは?

三ツ木　その方からね、いよいよ除隊になって、故郷に帰って、今度は産業戦士として働きます、というお葉書をいただいたんですよ。その後、もう一度会いたいから、新宿に行くから、という葉書が来ました。その後すぐ電報が来て、隊の一人が事故を起こし、連隊責任で全員が外出禁止になったので、行かれなくなりました。ただし、私は、帰還兵なので除外されると思います、申し訳ありませんが、歩兵隊の門前まで来てくれませんか、って。そしたら、また電報が来て、行かれることになりました、十時には出られますから衛兵門前の都電の停留所で待っていて下さい、って。行きました。

――お会い出来たんですね。

三ツ木　会えました。二度目でしたからね。明治神宮へ行って、映画を見ましたね。何の映画を見たんでしょう。当時、食事をするところがなくて、伊勢丹か三越の食堂で、お蕎麦の海苔巻きを食べましたよ。代用食ですよね。

代用食
米の代わりに食べる主食。めん類やイモ・カボチャなど。第二次大戦の戦中・戦後に用いられた語。

省電
「省線電車」の略。もと鉄道省・運輸省の管轄下にあった電車の通称。

――今風に言えば、デートですね。

三ツ木　そうですよね。男と女が並んで歩くだけで大変な時代でした。そして、兵隊さんが、えばっている時でねー。私ね、すごく怖い思いをしたことがあるんですよ。省電に乗っていた時、二つ星の若い兵隊さんが、私のすぐ側にいたんです。すごく混んでいましてね。その兵隊さんは、出入り口に背を向けていたんですね。電車の扉が開いて、階級の高い兵隊さんが乗って来たんです。サーベルを提げていました。それが、若い兵隊さんが振り向いて敬礼するや否や、往復ビンタでしたよ。「遅い」ということだったんでしょうね。大勢の乗客がいる中でですよ。

――お会いになった軍曹さんとはその後、どうなったんですか?

三ツ木　初めてお会いした時、私は、十九歳でしたね。その方が、「あなた、まだお若いんですね」とおしゃるのね。その言葉が、とても印象に残っているんですよ。しばらくして、「実家に戻って、家業を継いでいます」という手紙をいただいたんですが、その後、音信

不通になってしまいました。ずーと後になってからですけれど、私の同級生が、その方の近くに住んでいましたので、聞いてみたんですよ。そしたら、「あの人、戦死したんだって」と言うじゃないですか。驚きましたね。第二の召集があったのかしら、などと気になってね。もっと詳しく聞きたかったんですが、その同級生も、脳溢血で亡くなってしまったんですよ。

――それは心残りですね。阿佐ヶ谷にはどの位いらしたんですか。

三ツ木　昭和十五年から結婚するまでですから、十七年までです。私たち三人組は、二十五まで絶対にお嫁に行くのよそうね、って約束していたんですよ。しかし、一人は日赤に志願し、もう一人はお見合いし結婚へ。そして、私も見合いをし、話が進んでいました。

――とうとう結婚なさったわけですね。

三ツ木　そうなんです。主人の父が早くに亡くなり、後家になった母が、店を盛り立てていたそうで。主人は小学校を卒業するとすぐに、菓子屋で修行をし、家業の和菓子店を継いだそうです。戦争中は、店を閉めざるを得なかったそうです。それが昭和十六年頃でしょうか。主人は、中島飛行機に勤めていました。当時、軍需産業に勤めていると、召集が遅くなる、という話もあったそうです。結婚したのはそんな時でした。昭和十七年の一月です。

ご主人の出征

召集され海軍へ

――この写真は、召集された時のですか、やはり赤紙ですか？

三ツ木　そうなんです、赤紙が来ました。この写真は出征の時のです。昭和十八年七月十五日に、関東一円に一大召集があったんですよ。二、三日後に、横須賀で検査を受け合格して、海軍に編入され、すぐに豊橋へ行って、海軍航空隊に入ったんです。

――召集されたときは、どんなお気持ちでした？

三ツ木　あの頃は、召集令状が来るのが当たり前で、私たちのところに来るのは、遅いほうでしたので、さほど驚きもしませんでした。久我山から同じ海軍に召集されたのは、主人を入れて三人。大勢の人たちに送られて出征しました。私も赤ん坊を負ぶって、旗ざおを

赤紙
用紙が赤いところから、旧日本軍の召集令状の俗称。

武運長久
戦いにおける良い運が久しく続くこと。

三ツ木さんご夫婦の和菓子屋

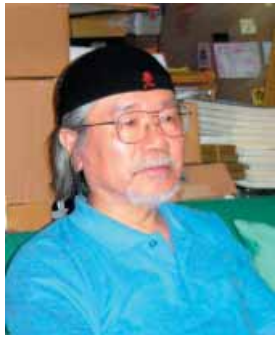
持って送りにいきました。東京駅で、召集された、私の同級生二人と従兄弟に会えたんですよ。

――その旗には、何て書かれていたんですか。

三ツ木　「武運長久、祝・出征誰々君」とか書かれていましたね。一人につき二つまでは旗ざおを車内に持ち込んでいいことになっていましたからね。帰りは、布だけはずして、竹ざおは東京駅の八重洲口広場に置いていくんです。だから、八重洲口は、竹ざおの山になっていましたね。

聴き手：副枝志保子
聴き取り日：平成十八（二〇〇六）年六月十六日

聴き取りの記録②
松本零士さん（68）



松本零士（まつもと　れいじ）さんの来し方
昭和十三年、福岡県に生まれる。本名は松本晟（あきら）。漫画を描くことが大好きな少年だった。第二次世界大戦が始まり、母方の実家がある愛媛に疎開。昭和二十八年、『蜜蜂の冒険』でデビュー。『宇宙戦艦ヤマト』『銀河鉄道999』など、大人から子供まで多くの人々に愛される作品を世に送り出した。平成十三年、紫綬褒章を受章。

私の「宇宙戦艦ヤマト」との出会いは、小学校の卒業を間近にひかえた校内の演奏会。私たちの学校では毎年、六年生全員で「宇宙戦艦ヤマト」を演奏していたのです。これをきっかけに、松本零士先生の作品のファンになった私。今回、先生のお家にお邪魔し、戦時中のお話や、漫画家として活躍されるに至るまでの様々なエピソードをお伺いし、とても感激しました。また、「昔の大人たちはとても優しかった」（知らない人であっても、悪いことをする子供は厳しく叱り、同時に危険からはしっかりと守ってくれる）という先生の言葉に、これからの私たちの課題を見つけた気がしました。（わぐり）

レイテ戦
一九四四年十月にフィリピン・レイテ島沖で行われた、日本海軍とアメリカ海軍との総力戦。シブヤン海海戦、スリガオ海峡海戦、エンガノ岬沖海戦、サマール沖海戦の四つの海戦からなる。日本側の作戦名は「捷一号作戦」。アメリカ軍によるフィリピン奪還作戦「マスケティーア作戦」の阻止が目的であったが、結果的に日本海軍はこの海戦で敗北。アメリカはフィリピン奪還への足がかりを得る形となった。また、日本軍の神風特別攻撃隊による攻撃が、はじめて行われた戦いでもある。

体に染み付いたサイレンの記憶

戦争中、私は明石におりました。明石では空爆の記憶は何もない、まだ平穏な状況です。

私の父親は飛行部隊のパイロットをやっておりました。戦闘部隊です。ですから、オヤジが毎日上を飛んでいる。そして家に帰ってきて、窓からアクロバット飛行をやっている戦闘機を見て、「おお、誰々はまだ飛んどるか」と言うので、（戦闘部隊が）非常に身近になるわけです。それに、飛行場に連れて行かれて離発着も見ましたし、エンジンのにおいや温かさも全部知っていたのです。小学校にはまだ行っていない、四つ五つころ。これが明石での体験です。

父親が戦場――レイテ戦に行ってすぐ疎開しました。場所は、母親の実家――母の先祖の地である愛媛県の新谷村（現・新谷市）。昭和十九年のことで、当時私は一年生でした。早生まれなので、既に六歳です。ですから、都会の記憶と六歳からあとの戦争の記憶とが重なっているんです。一年生の終わり頃から、翌二十年に入ってくると、空襲が始まりました。「ウ～ウ～ウ～」と断続するのは警戒警報、「ウ～」と鳴りだしたら空襲警報です。今でも何かでサイレンが鳴るときがあるでしょう？　そうすると、やはり今でも体が反射的に不気味さに備えるような反応になるんです。あのすり込みはすさまじいもので、いまだに消防署のサイレンでも気持ち悪いです。それだけ切迫感があったわけです。

御名御璽
日本国の天皇の名前（の署名）及び公印のこと。署名のことを御名といい、公印のことを御璽という。

学校で弁当を食べるときは、「きょうもお弁当がいただけるのは、戦地の兵隊さんのおかげです」と言ってから、「合掌、いただきます」なんです。それをやるのが習慣でした。先生も、十月三十日の日付の教育勅語を読まれるけど、一年生にはあれはいささか難しくてわからないけど、御名御璽だけは覚えている、最後だけね。

それから続々と、大阪や神戸から疎開してきた同学年の少年たちが、集団生活に入ってくる。私は先祖の地ですから、そこの住人と同じなんですが、その少年たちとの落差は感じました。田舎に住んでいたから、田植えから何から、一式を子供のときに全部体得しま

してね。それから、道ばたに生えている草、山に生えているきのこや植物。食えるものと食えないものを、自分で識別できるんです。そして、山猿と化しましてね、おにごっこは木の枝から枝へと飛び移って。落ちたら負けなんです。よくへし折れるんですよ（笑）。

時々怪我するんですけどね、だんだん落ち方が上手になって怪我をしなくなる。一方、大阪からか疎開してきた少年は崖から落ちて、骨折の大けが。私らにとってみれば、毎日落ちている場所ですから何てことない。要するに、都会の子らは身のこなしがまだできていないんです。都会生活と、田舎でサルと化して暴れているのでは全然違うんですね。

自然の中で学んだこと

その土地の状況は、日本中で一番穏やかな田舎だったと言っていいでしょう。「おぼろ月夜」などの歌ができた場所です。肱川（ひじかわ）という、坂本龍馬が脱藩した際に辿った川です。そこで水に入って魚とりをやる。

ウナギと蛇は手触りが同じなんですよ。岩の間に手を突っ込むでしょう。ぱっと引きずり出したらアオダイショウだったり（笑）。その蛇はぶち殺してしまうんですよ。一度、亀のクビを抜こうとしたことがあります。すぽんとでてくると思ったのでね。竹の火ばさみで、足でこう押さえて……ひっぱったら、亀さんはクビが抜けて血だらけになって死んでしまいました。初めて亀の甲羅とカラダは一体化したものだというのを理解して「亀さんごめんなさい」と。二度と亀はいじめませんでした。

このときは、本当にごめんなさいと思ったけれど、その代わり私は昆虫好きで、よく殺していました。私は昆虫マンガでデビューしているのですが、昆虫好きにもいろいろありましてね、私は分解してみるのがおもしろかった。数千匹、数万匹の昆虫を殺しているはずです。それから、食えるものは虫でも食いました。焼いて食っちゃった。皆さんはぞーっとするでしょうけど、イモムシ――クヌギ虫というのがあるんですよ。クヌギの木の中でカリカリ、カリカ

坂本龍馬脱藩
一八六二年、三月二十四日、当時二十七歳の坂本龍馬は、同士、澤村惣之丞とともに高知を出奔、予土県境・韮が峠を越えて伊予（愛媛）に脱藩を図った。脱藩後は九州地方を放浪。同年松平春嶽の紹介で勝海舟と出会い、龍馬の人生は大きく変わることとなる。

リって音がするとナイフで削って穴を空け、引っ張り出すとこれぐらいのイモムシが出てくる。それを串に刺して焼いて食べると、カリカリして、今で言うクッキーのような味がしておいしいんです。

ただ、今の人が見たら不気味でみんな逃げ出すでしょうね。そんなふうに、蜂の子とかクヌギ虫とか襲って食べる。スズメバチの巣も襲うんです。もちろん、たまに返り討ちに遭いますよ（笑）。今まで、何度も遭っています。蜂の子を食いたい一心で巣を襲う。そうすると周りを飛んでいる警戒蜂がいる。そういう場所で動物の習性を覚えていくんです。明石という都会から、四国の田舎に疎開して、その自然の中でいろいろなものを存分に体得した。しかも、わら草履の時代。木の切り株や竹の切り株の上を走るとえらいことになるんですよ。足の裏に突き刺さりますからね。何度もけがをしましたよ。転ぶからいつもひざはかさぶただらけ。それをはがすのがおもしろくてね（笑）。

ですから、戦争とは何たるかということは、子供にとっては遠い世界のものであって、一年生では、正確な意味での敵愾心（てきがいしん）とか、国の成り行きというのは理解できないですね。ただ、「成り行き上そうらしい」「父親は南方に行っている」ただそれだけのことなんです。でも、残されたほうは、そういう状況下で集団登下校をする。空襲警報が鳴ると、家が近ければ家に帰れ、学校に近ければ学校に来いというのが決まりだったんですが、学校の門前まで行っても、空襲警報がなると回れ右して帰ってしまうんですよ。それで、山に入って遊ぶわけです。そうしたら、本物の米軍機の編隊が頭上を通過していくわけですよ。最後尾にいたのがくるっと旋回してこっちに向いてきたこともあります。そういったときは、太い木の根っこを楯にしてかがめといわれているから、そのようにしたら、頭の上を飛び越えて反対側に旋回して帰っていきましたけれどもね。

食べ物は何でも手づくり

戦死の公報が入る家もあるんです。そういうのがまだピンと来ない年代なんだけど、夜、友人の家に本を返しに行ったら、昼間陽気

に振る舞っていたその子のお母さんが、仏壇の前で泣き崩れている。それを見て、黙って後ずさりして帰ってきたこともあります。そういうことで、戦死ということがおぼろげながら分かってきたんですね。

そういう時代だったものですから、男手がいない。お年寄りは別として、戦える男は全部戦場に行っているわけです。ですから、我々は子供ながら田植えもやりましたし、薪割り、脱穀にいたるまで、フルコース全部やったんです。それからコンニャクも豆腐も味噌も全部自家製。

塩分はどうやって手に入れるかというと、上級生が長浜の海岸までいって、樽に海水を汲んできて、それを塩の代わりにしたんです。ですから、しょうゆ、味噌、塩といったものは、全部自分のところでつくるものだと思っていました。作り方は今でも全部覚えています。ひどい話で、何かを飲み込んでいる蛇を捕まえて、千歯扱でしごいたことがありました。そうしたら、半分解けたカエルや、表面だけがきれいに溶けてゼリー状になったカエルが出てきたり。そういう馬鹿なことをやっていたんです。それでまた米をひいているんですからね（笑）。

千歯扱
江戸時代前期に発明された脱穀具だが、戦中、戦後の農村部においても無くてはならない農具として使われていた。

ヤマカガシをひっぱたいたら、こちらに向かってくるので、「蛇の分際でこの野郎！」とたたき殺してぶら下げて帰ったら、ばあちゃんが腰抜かして「お前、それ毒蛇だ」というんです。やられたら危なかったですよ。そんなこと知らないから、元気にぶち殺しました。マムシもぶち殺してましたね。子供というのはそういうもので、存分に自然の中で暴れ回って、体をつくったのは事実です――私の場合ですが。

ただ、戦死の公報が入ってくる家のあの無惨な有様……。

不発弾を拾って遊ぶ

本格的な空襲が始まりますと、南方から来るB29の大編隊が視界全部を覆うんです。それで高射砲は撃つわ、地響きはするわ。学校にいても同じことなんです。今度は戦闘機が上低空でつっこんできて、機銃掃射をもろにあびました。これは実弾で撃っているわけ

です。タタタン、タタタンと。音は数発しか発砲していないように聞こえるけど、六連装ですからね、その轟音のすごさと恐怖感。我々はそういう実体験をした最後の世代ですね。そのときは小学二年になったばかりじゃないですかね？

ただ、オマケがありまして、田んぼに行って玉を拾ってくるんです。飛行機は速度がありますから、反射速度の間隔が短い機関銃でもそうとうな間隔をあけて穴が空いているんですよ。だから、棒をこう入れるとコンと当たる——玉があるわけです。これを拾っては、友達と山分けしていました。それをポケットに入れて宝物にしていたんです。破裂させようとして、不発弾を手に握って土間にたたきつけたり、置いておいて石で叩いてみたり。それでも破裂しないと、石臼に入れて杵でついてみたりね。いろんな馬鹿なことをしてました。今考えるとものすごいけど。戦争が終わっても持っていました。

田舎ですから、食べ物はかろうじてありました。米や大根、芋、豆……。食べ物にはこと欠きませんでした。びわの木、柿の木、栗の木もありましたし。そういう自然の恵みは受けているから、さほ

B29
第二次大戦末期から朝鮮戦争期に実戦配備された、長距離戦略爆撃を想定して設計されたアメリカ軍の主力戦略爆撃機。当時の爆撃機としては並外れたスペックを搭載しており、高高度からの爆撃が可能であったB29に対して、日本空軍の迎撃機では有効な対処が不可能であった。広島・長崎へ原爆を投下した、「エノラ・ゲイ」「ボックスカー」の両機体も同型である。

高射砲
上空にいる敵航空機を撃墜するために作られた火砲。旧日本陸軍では高射砲、旧海軍では高角砲と呼んだが、同じものである。

ど飢餓感はなかったです。隣の寺の息子はボクの同級生だったから、一緒に柿の木に登って——サルと同じですから、枝の上でカキを一口囓るんですね。すると、こっちにもっとうまそうなのが見えて、食べかけを捨ててこっちを食うわけです。都会ではみんな飢えているんですよ。でもそんなこと知らないから、少年といえども「十年経ってもおれのことを忘れるなよ」みたいな会話をしているんです。

それと、場所がお寺ですから、墓石の上を飛び回るのも鬼ごっこ。そうしていると和尚さんがやってきて、「墓石を倒すなよ」と。でも、「子孫がこれだけ元気だから、先祖は怒りゃあしない。くれぐれも墓石だけは気を付けろよ」と言っていました。そういう優しい時代でしたね。それから、登校の途中ですれ違った知らないおばさんが、「はい、これあげよう」って、スモモをくれたりね。それが昭和二十年代。戦後になってもそうだったんです、私の田舎は。

ただ、ラジオを聞いていますと、防空情報というのがありまして、ブザーが鳴って「防空情報、敵何々何機、どこそこからどこそこ方面へ」とか「今、どこそこを通過」「愛媛県上空に進入しました」

というと、ぐわーっと地鳴りが始まるわけです。編隊できますから。あわてて倉の裏や石の影に隠れると、そのあとその編隊の中から何機か抜け出てきて撃ってくるわけです。その轟音と射撃音。機銃の発射音。そうして見たら、あちらで汽車が白煙を吹き上げているんです。機関車が穴だらけになって。もちろん死者も出ました。飛行機の両翼から煙を噴いた爆弾みたいな、ドラム缶みたいなものが落ちてきたので、あわてて物陰へかくれたら、ズシンズシンと轟音が響いてきた。駅を狙って撃ってきているわけです。

五郎という駅だったんですが、ここが分岐点ですので狙われるわけですよ。私の先祖のじいちゃんの家はそこにあって、そこが狙われたんです。でも子供にとってもはその程度で済んでいる。ただ、徴兵されて帰ってこなかった家――問題は終わってからですよね。

終戦の日

八月十五日、肱川で泳いでいたら、おっさんが「戦争が終わったぞー」とメガホンを持って駆け抜けてきたんです。ものすごく天気がいい日でした。

終わったらしいから帰らにゃいかんと思って、川から上がりかけたら、私が脱いだ服の上に黒牛がいまして。誰かつないじゃったんです。黒牛の腹の下に自分の服がある。四国の黒牛というのは、食えばうまいけど、つっかかってくると恐ろしいですからね。「牛が離れたー」と言われて、ぱっと牛と自分の服を見る。お尻が見えていたらいいけれども、顔がこちらを向いていたら、木に登って逃げなければなりません。これは今でも夢に見ます。

服を奪還するのに少々戸惑ったのですが、帰る途中、あぜ道に女の人やおじいちゃんが座っているんですよ。誰一人、微動だにぜずにじーっと地面を見て座っている。その黒い影が映っているのを、今でも鮮明に覚えています。

家に着くと、雨戸が全部締めてあって「おかしいな」と思ってがらっとあけて入ったら、洗いのところでうちのばあちゃんが、日本刀の手入れをしている。「どうするんか」と訊いたら、「米兵が来た

ら、これで差し違えて死ぬ」と。「お前も侍の子だったら覚悟せえよ」と言うのです。ところがその真意が理解できない年代なので、そうか敵が来たらやるのかとけろっとしていましたが、考えてみたら、敵が来たら辱めをうけるから――日本国落城ですね――差し違えて死ぬというのは家族ですよ。だからばあちゃんは長刀や日本刀をいざというときのために並べて寝ているわけです。その真意が当時の私にはわからなかったので平気だったけど、それを正確に理解したら怖くて家にいられなかったでしょうね。

幸い、ばあちゃんのせがれも無事に戦地から帰ってきました。うちの親戚はほとんど戦死などせず、運良くみんな帰ってきたんです。

こんな場面がありました。特攻隊スタイル――飛行服をきてマフラーを巻いた青年が道を歩いていくわけです。そうすると私のばあちゃんが「どちらへ帰んなさるか」と声をかける。すると「どこどこ（へ帰る）」と答える。そうすると「よかったのう」と言ってね。その青年というのは、何も持っていない。手ぶらでね。飛行服のまま自分の家に帰っていくんです。それが終戦直後の風景でしたね。

特攻隊
敗戦の気配が色濃くなった太平洋戦争末期に、日本軍が編成した体当たり作戦を実行する為の特別攻撃隊。爆弾を抱えた軍用機のみならず、「回天」「震洋」「伏龍」のような海戦兵器によっても特攻隊は編成された。外国語においても「トッコウ」「カミカゼ」は戦死を前提とした玉砕攻撃として通じている。

聴き手：わぐりゆみこ
聴き取り日：平成十八（二〇〇六）年七月二十一日

聴き取りの記録③

濱　栄子さん（85）

濱　栄子（はま　えいこ）さんの来し方

大正十年四月十日、大阪府生まれ。子供の頃から読書が好きで、「キング」などの雑誌を読みふける。尋常小学校卒業後、大阪府立追手前女学校に入学。卒業間際に、兄の紹介で知り合った義雄さんとご結婚。折しも戦争が激しくなり、医師であった義雄さんも出征。乗り込んだ吉野丸はバシー海峡で撃沈。十八時間の漂白の末、九死に一生を得る。戦後、復員し、その後は、医療に従事された義雄さんとともに平和な日々。現在、映画や音楽などを楽しみながら、悠々自適にお暮らしになっている。

濱さん宅を訪問して驚かされたのは、膨大な記録の蓄積。女学校時代の割烹の教科書から、暮らしのなかで目にとめた新聞の切り抜きまで。その量を書籍にしたら、一〇〇冊は下らないでしょう。こうした記録やメモを背景にしているので、濱さんの記憶はきわめて鮮明です。八十代半ばに差し掛かろうとは思えないくらい早口で往事をお話しくださいました。ここでは、その一部を抄録し、掲載いたします。（盛池）

井戸替え職人がおった

昭和初期の大阪の街――。私が幼なかったその時代は、街にはまだクルマなんか走っていませんでした。自転車だって少なかった。でも市電はたくさん走っていましてね。馬車もよう引かれてました。馬がぽとぽとウンコしてね、あと牛車とか、肥え車。臭い臭い。街が不衛生やったから、夏になったら、チョウチフスとか疫痢とか、伝染病がよう流行りました。

お米や物資の配達は、みんな自転車に乗ってしていました。私の家には自転車はなかったから、うちのお兄ちゃんは、近所の酒屋さんに自転車を借りにいって、それに乗って、よう出かけてはりました。軍国主義の時代やったけど、軍隊がいばることもないしね、平和な時代でしたよ。

私の生家は、大阪市東区空堀通り三丁目。いまでいう天王寺区の上本町のあたりです。借家の長屋でね、土間があって格子戸があって、二階建てやけど狭い家でした。でも格子戸を開ければ、みんな

チョウチフス
腸チフスのこと。チフス菌によって引き起こされる感染症。ハエやネズミなどを媒介として感染することもある。

顔馴染み、そんな家でしたよ。

家のなかには竈があってね、そこで薪をくべて、ご飯を炊いてました。電気は定額灯いうて、十六ワットの電球が、一部屋一つずつくらいついてました。決まった時間に点いて、決まった時間に消える。球が切れたら、電気屋さんにもってきてもらうの。昔は電気がよう切れてましたわ。

水道も家にはまだ設置されてなかったから、外の共同水道までいくんです。石畳の場所に、井戸と水道が両方あってね、そこの三和土にバケツを並べて、水を汲んで顔を洗っていました。井戸は年中、常温だから、冬は温かくて、夏は冷たい。水もきれいでしたしね。用水としても、井戸はええもんでしたよ。夏はスイカを冷やせるし、冬は顔を洗うのにもってこい。井戸の水は重宝してました。

毎年夏に、「井戸替え」いう行事がありましてね。井戸替え職人いう人がいはるんです。その職人さんがやってきて、水を汲み出して、井戸の底に入って、中をきれいに掃除してくれはるんです。

たまに猫がはまり込んで死んだりするから、猫の死骸なんか出てきてね。そうしてきれいに掃除し終えると、またじわじわと水が出てきて……。長屋の一つの行事でした。

夜に外の通りに出たら、夜店が出てましたよ。二の日と三の日いうて、毎月、二と三がつく日の夕方、学校から帰ってきたら、路上に縁日みたいなお店が出るんです。電気の職人さんがきて、一店ずつアセチレンガスのランプを点けていって、そのガスの臭いが漂ってました。夜店は、ずらーっと向こうまで並んでてね。真ん中のほうには、たこ焼き屋はなかったけど、お好み焼き屋なんかが出てました。奥のほうには、古本のお店もあってね。『キング』とか『講談倶楽部』とか、よう買って読みましたよ。

お灸のお仕置き

小さかった頃は、家の手伝いなんかようしました。お茶碗洗ったり、掃除をしたり、箒で家を掃いたりね。でも狭い家やし、大したことあらへん。ちょっちょっと掃いたらしまいや。

ネンネコ
幼児を背負った上から羽織る広袖の綿入れ半纏のこと。

ヤイト
灸のこと。

弟の嘉彦のお守もようさせられました。背中にネンネコ着て、おんぶしてね。母親が市場から帰ってくるまで、家で留守番してました。重かったですよ。尋常小学校に入っても、よくおんぶ紐くくりつけられました。おむつ替えたりはしませんでしたけど。

そんなふうにお手伝いもしましたけど、兄弟げんかもようしました。お姉ちゃんの悪口いうて、泣かしたことあります。「美代子が泣いた」とかいうてね。悪いこというてたな、お転婆でしたわ。

行儀悪いことするとね、母親にお灸据えられましてん。たとえば、「買わへん」いうてるのに、無理に「買ってちょうだい」いうでしょ。大阪弁で「ごんたこねる」いうんやけどね。そうすると、しまいに怒られてね。うちの母親ホンマに怒りましたよ。押さえつけられて、私なんて、かわいそうなもんでしたよ。「ヤイト据えるで」なんていわれて、手をぱっと出されてね、藻草を乗せられて、線香に火を点けられて……。

だから子供のころは、母親のこと嫌いやったね。お灸乗せられて、線香で火なんか点けられたら、熱い熱い。よその家も、そんなふうにやってたかは知らんでっせ。うちはそう。

軍服屋で成功した祖父

私は大正十年四月十日、逓信省役員の父中田世志人と、母ミツの次女として、大阪で生まれました。世志人三十三歳、ミツ二十九歳の子でした。

母方の祖父は、龍造さんといって、元和歌山藩士の足軽でした。武士のあとについて、槍もって走る役目。武士の家に養われている兵士やね。鳥羽伏見の戦いに参加したけれども、御一新になってから、なんとか一旗上げたいと思って、熊本に都落ちしたらしいですわ。ちょんまげが切られるときは、「切られるのが嫌だ〜」って逃げ回ってね。切られたのが和歌山藩士のなかで、最後から三人目やったらしいわ。それで和歌山城に宿直で寝泊りしている間に、こっそり切られてしまったとか。

龍造さんが熊本に行ったのは、阿蘇山が噴火したから儲かると

思ったんちゃいますか。それで熊本で軍服つくる会社をつくって、製造を始めたの。その事業については母から聞いたけど、詳しくは知りません。龍造さんは母をめちゃめちゃかわいがって、踊りに三味線、たくさん習わせたそうですよ。蝶よ花よですよ。だからうちの母は、三味線なんて上手上手。

一方、母方の祖母のヤスさんという人は、龍造さんの後妻でした。龍造さんは、前妻さんに長いこと子供ができなかったからね、軍服屋の番頭さんを養子にして、その人に跡を継がせようと思っていたらしいです。でも、どういういわれか知らんけど、熊本の相撲取りの娘だったヤスさんと仲良くなってね、で、ミツと直之助という、二人の子供ができたんです。私の母と叔父ですわ。だから祖父は、大喜びでおヤスさんを本妻にしたわけです。前妻さんは、亡くなったのかな、詳しくはわかりません。私の母は、弟のことをナオ、ナオって呼んでね、私が生まれてからも、しょっちゅう直さん、母のところに遊びにきてましたよ。

母ミツの生家は、熊本市古城堀端町にあって、私の本籍もそこ。

龍造さんの軍服工場がえらい成功してね、三百坪くらいの大きい家だったらしいですよ。職人もおったし、馬車でも何でも揃ってたって。でも龍造さんは、若くして亡くなったらしいですわ。朝に風呂屋にいくのが好きで、家にお風呂があるのに、「おヤス〜、風呂入りにいこか」っていって、脳溢血。六十歳前後だったそうです。

軍服屋には、跡取りの養子がいたからね。ヤスさんは熊本の家にいられなくなって、私の母が、父と結婚して大阪に移るとき、ついてきて一緒に住んでいましたよ。跡を継いだ軍服屋の番頭さんは、息子さんがようできた人やったらしいわ。京大かどこかわからないけど、大学を出て、店を繁盛させてね。自分の家を乗っ取った人やのに、おばあちゃんは、その人のことを「ようできた人やった」っていってはった。素直な人やね、私のおばあちゃんは。

字もよう書けない、教養もあまりないおばあちゃんでしたけど、私のことかわいがってくれました。お寺に連れていってくれたり、大阪で寄席に連れていってくれたりね。寄席の内容はようわからんかったけど、楽しかったわ。でも、おばあちゃんは、熊本の家が大

きかったからね、大阪に移って、家をはじめて見たとき、ここに住むのかって、涙がボロボロ出たらしいわ。「こんな借家みたいなのは屁でもない」ってよういうてはったもん。そんなおヤスさんが亡くなったのは、私が小学校に入る前です。妹が生まれるころやから、大正十四、五年やね。

豪傑な父、手八丁口八丁の母

私の母ミツは、父世志人とお見合いで結婚しましてん。世志人さんのお母さんが、男の子ばっかりたんとあるから、好きなの選んでくださいっていうたらしいよ。そのなかから父が選ばれたわけ。

父の家はもともと鉄砲鍛冶屋さんで、いちばん上のお兄さんが跡を継いでました。男の子が多かったから、あとの兄弟は継がんとね、すぐ上のお兄さんは海軍の軍人さんで、その後アメリカ航路の船長さんやりはった。いちばん上のお姉さんは、お喜久さんいうえらい美人でね。熊本の日奈久いうところの、村田典太さんいうお金持ちの家にお嫁にいきはった。私の父が亡くなったとき、その時分で五十円送ってきはったもん。いまでいう五十万円くらいでしょうかね。さすがお喜久おばさんやってね。それはそれは贅沢な暮らしてたらしいよ。熊本の日奈久は、温泉町やから家のなかに温泉もあったりね。朝から温泉、浸かったりしてたんちゃう。

父の世志人さんは、逓信省の役人でした。郵便ではないですよ。「トンツートンツー」ゆう電信と電話の会社や。のちの電電公社やね。頭のいい人でね、英語で日記つけてました。絵もうまいしね、芸術家肌や。近所の奥さんの繻子の帯に、薔薇の絵を描いたりして、奥さん方から喜ばれてました。酒も好きでね。一日七合も飲んでました。それに器用な人でね。ぱーっと羽ばたいて飛ぶ、大仕掛けの蝶のおもちゃなんか作ったりして、近所の子供に配ったりしてました。子供たちも大喜びでしたよ。

とにかく豪傑な人でした。定年退職したときなんか、退職金の四千円の半分近く使って、数カ月間、日本国中を旅行してました。四千円いうたら当時、家が建つくらいの金額ちゃう。母が烈火のご

とく怒ったのを覚えてます。でも帰ってきても、父は旅行の話なんか一切しはらへん。知らん顔しててね。そんな人やった、私の父は。私が女学校を卒業した年、父は五十二歳で亡くなりました。

母のミツは、明治二十五年生まれやから、いま生きていたら百二十歳や。八十歳過ぎても、かくしゃくとしていてね。「何番の何番に電話して」って、よその家の電話番号まで覚えていましたよ。しっかりものでね、手八丁口八丁の人でした。長生きして、八十九歳で亡くなりました。

五人兄弟の次女として

私の兄弟は、長男が龍輔。おじいちゃんの「龍造」から名前とってつけられはった。姉の美代子は大正六年生まれ。次が私で、大正十年四月十日生まれ。その下が富子。その間に一人、栄太郎いう男の子がおったんですけどね。一歳で死にましてん。うちの母が泣いてね。その子のこというと、「いわんといて、あの子のことは」って。

いくつで死んでも、子供の死は悲しいんやね。

妹の富子は大正十五年生まれ。女同士やし、姉と比べて、歳もそう離れてないし。しょっちゅう一緒にお芝居なんか観にいってました。富子は五年前、胃がんで亡くなりました。寂しいね。それから、いちばん下の弟の嘉彦は、昭和四年生まれで、私より八つ下でした。横浜高等商業学校を出て三井物産に勤めてました。

ご家族と共に

恋愛小説にはまって

小学校は、家から歩いて三分くらいの清堀尋常小学校に入学しました。入学を目の前にしても、ドキドキなんかしませんでしたよ。私は図太いからね、何でもかんでも楽しかったもん。男二つ女二つの四クラスで、一クラス五十人。大きな編成でした。一学年二百人やからね。

男の子と女の子の交流なんて、しませんしません。そんなんしたら、先生に怒られますもん。授業も男女別々ですよ。だから男の子としゃべったこともないわ。密かに「あの人、素敵やな」と思ったことはありましたけどね。大島さんいう人でね。頭のいい人で、北野高校に入りはった。その後どうしたかな。

習っていたのは、国語と算術……。そろばんはみんな、個別に習いにいってました。私は習いにいかんかったから、いまだにそろばんできませんね。あと体操はね、跳び箱飛んだり、鉄棒で逆上がりしたり。それから女の子やから、四年生ぐらいになったら、裁縫の授業もありました。あと理科の授業もありましたけど、「社会」なんていう言葉ありませんでした。歴史は国史いうてましたから。

尋常小学校では、遠足とか運動会もありましたね。うちの母親が面倒くさがりでね、運動会なんかこなかった。お弁当だけ届けてくれた。小学校の運動会なんか観たくなかったんちゃう。富子は小さいし、姉は高等小学校いってますし。私は一人寂しく、運動会で体操していたこと覚えてますわ。ただ踊ったり、走ったり、徒競走したりね。そんなことですわ。

勉強はクラスで一番でしたね。『キング』だとか『講談倶楽部』とか、大人の雑誌を読んでたからね。早くから字が読めるようになったんや。探求心が旺盛やったからね。母親にも「これ、なんていう字」「これ、なんて読むの」って訊いてましたよ。わからない漢字は、自分でカタカナでルビ振ってました。だから覚えたのは、カタカナばっかりでしたよ。ひらがなはもっと後。カタカナのほうが読みやすかったです。

帰ってから寝るまで、本ばっか読んでました。『キング』『講談倶

尋常小学校
明治五年の学制発布にともない設置された初等教育機関。六歳で入学し、六年間で卒業する。

「キング」
大正期に創刊された講談社の大衆娯楽雑誌。発行部数一〇〇万部を越えた。戦争中は敵性語ということで「富士」に改称された。一九五七年終刊。

「講談倶楽部」
講談社が刊行した雑誌「少年倶楽部」「少女倶楽部」の総称。

吉屋信子
一八九六年〜一九七三年。大正昭和期に活躍した日本の小説家。新潟県生まれ。大正五年から「少女画報」誌に連載した『花物語』で人気作家となる。その後、『地の果まで』で小説家としてデビュー。

菊池寛
一八八八年〜一九四八年。小説家、劇作家、ジャーナリスト。香川県高松市生まれ。京都大学卒業後、時事新報社会部記者を経て小説家に。私費で雑誌『文藝春秋』を創刊し成功を収める。

丹羽文雄
一九〇四年〜二〇〇五年。小説家。著書に『菜の花時まで』『海戦』『一路』『親鸞』など。

楽部』、それから『少年倶楽部』とか。夜店で雑誌買って、雑学してたんや。吉屋信子、菊池寛、丹羽文夫の恋愛小説とか。だから恋愛なんてこと、三年生のときから知ってました。おませでしたね。小説の世界に、ずっぷりはまりこんでましたよ。

家に帰ったらね、母親の本棚からあらいざらい取ってね、二階に上がってどさりと積んで、読むんです。女学校へ入っても図書室があったから、たんと本がありました。だから学校で、他の人は運動しているのをよそ目に、私は一人図書室に入ってね。学校の本を門限までたくさん読んでました。それから近所の図書館にもいきました。清水谷公園ゆうのが近くにあってね、その中に、小じんまりした図書館があったんです。本でも雑誌でも、何でも揃ってました。『少年倶楽部』『少女倶楽部』もありました。分厚い本でしたよ。

新刊本なんか買ったことないです。母親が買ってくれへんもん。そこら辺ケチでしたよ。せやから五銭くらい出して古本で買ってね、直木三十五の『南国太平記』とか、吉川英治の『宮本武蔵』とか、よう読みました。でも友達とは、本の話なんかしませんでした。

オヤマサンごっこ
オヤマサンは「女形（おやま）」さんに由来すると思われる。今でいう人形遊び、着せ替え遊び。

「黄金バット」
昭和初期以来、子供たちの間で人気を博した正義のヒーロー。当時の紙芝居を象徴する存在であった。

遊び放題の小学生時代

小さい頃は、よう遊びましたわ。人形遊びやりました。夕ご飯食べる前に一人でね、しょうもない遊びですよ。箸みたいな棒に頭だけついた人形があってね、それに自分で着物を着せるわけ。男の人の人形にはちょん髷結わせたり、女の人の人形には島田結わせたりね。大阪弁で「オヤマサンごっこ」いうんですよ。あと、布をお祖母ちゃんや母親にもらって、帯びを締めたりね。ちゃんと箱に布団入れて、寝かせたり。「こんにちは」とか、やってました。

外で遊ぶのも好きでした。午後になると、自転車の荷台に道具を積んだ紙芝居屋がやってきてね、『黄金バット』とか紙芝居、よう観ました。一銭渡すと、せんべいに蜜塗ったようなお菓子くれるんです。でも私は、お金もってないから、お菓子買えませんでした。母親に「菓子なんか食うのやめとけ」言われてたからね。だから高いとこ上って、紙芝居だけ観てました。

あと昔は、蝋石いうのがあってね。チョークみたいなやつや。石

みたいな白いのが、お店でよう売ってたんです。それで、石畳やレンガ道に丸印を描いて、「ケンケンパ」って飛んで遊んでました。当時の大阪は案外、石畳が多かったんですよ。かくれんぼしたり、まりついたり、鬼ごっこしたりね、他愛のないもんですよ。

夕方になったら、ぱっと、外の電気が点くんです。そしたら、「電気点いたら帰っておいでーっ」てね、家に帰るのよ。「子取りがくる」とか、よういわれましたよ。でもそんな目遭ったことない。近所にどんな人がいるか全部知ってるもん。遊び放題でしたよ。

日曜になるとね、外に出て、日曜学校にいくんですわ。お寺とかキリスト教の教会でね。住職さんや牧師さんが、何や知らんけど教えてくれはりましたわ。キリスト様のお話聞いて、キリスト教拝んだり、住職さんの話聞いて、親鸞さん拝んだりね。日曜日はそんなことして遊んでたわ。教えてもらったいうより、楽しく遊ばせてもらってたんやね。宗派なんか関係あらへん。

パンツ履くのも練習

そのころ、一生懸命パンツ履く練習したことあります。昔の人は着物やったからね。パンツ履いてへんかった。だから、足またいで、お腰ぐっと上げて、おしっこしてたんですわ。パンツが普及してきたのは、私が尋常小学校に入った頃。「これ、こうして履くねんで」って、お友達と訓練したことあるよ。〝パンツ変遷〟ですね。

映画も好きでしたね。でも子供のころは一人でいかれへんもん。お父さんかお母さんに、連れていってもらってました。うちの母親はお裁縫ばっかりしていたからね、お裁縫に飽きると、「映画観にいこか」って、私をダシに、よう外出てました。

玉造いう環状線の駅前に商店街があってね、そこに映画館が二、三ありました。まだ「活動写真」いうてね。男の席と女の席が分かれてたんです。無声映画でしたから弁士がいてね、男の役にも女の役にもなって、声上げて説明してはった。音が鳴らへんから、五、六人の合奏団がいてね、ピアノ弾いたり、バイオリン弾いて、バック

ミュージック演奏してましたよ。そこでようチャンバラ映画なんか観てました。大河内伝次郎とか片岡千恵蔵とかね。でも私は、学校の先生にみつかったら恥ずかしいから、顔をこう手で隠してね、こっそり観てました。

皇太子殿下誕生の日

清堀小学校二年生くらいのときかね、大阪城の天守閣が建ちました。それまでは、そこは原っぱやったんちがう。えらいイベントがありましてね、うちの父親が逓信省に勤めてたから、「判任官以上は招待される」いうて、えらい喜んでた。ふだんあんま、ごちゃごちゃいわん人やのに、うれしそうにしゃべってはったん覚えてるわ。天守閣までエレベーターで上がったらね、展覧会場みたいなもんがあったんです。でも私は、大阪城なんかあんまいかんかった。

六年生のとき、十二月二十三日、平日の朝だったと思いますけど、皇太子さんが生まれはったときは大騒ぎでした。「おめでとう、おめでとう」って、街中が浮かれてね。皇太子さんお誕生の歌っちゅうのもあったんですわ。「皇太子様お生まれになった〜♪」って知ってる？そんなしょうもない歌や。あんな歌誰がつくったんだか、へたくそな歌。流行ったんですよ。ラジオでよく流れたわ。「鳴った鳴ったポーポー♪」やて、傑作やね。サイレン鳴るし、提灯行列もあるし、花電車も出て、日本国中沸き立ってたんと違う。

うちの母なんか、祝賀行列せないかんということになって、先頭に立って、自分で編んだ赤と水色の編み笠かぶって、えらいええかっこしてましたよ。でも私は受験勉強で忙しかったからね。外には出ませんでした。いくら街が大騒ぎしても、自分だけは家でしっかり勉強していてね。生意気やったね。

仲良しだった月岡さん

月岡照子さんいう、仲良かった人がいてね、その人とは、よう遊びました。「いづもや」いう、道頓堀に二軒くらいある、有名なう

大阪城の天守閣
一六六五年の落雷によって消失し、その後、一九三一年、市長の呼びかけのもと、市民の募金によって復興された。

判任官
明治憲法下の官吏の等級（八等以下）、役職。

花電車
装飾された路面電車のこと。祭の山車を電車にしたものが近い。祭に際して運行された。

月岡照子さん
栄子の小学校時代の親友。有名なうなぎや「いずもや」の娘。栄子は家によく遊びに行った。女中が三人もいた。栄子は成績が良かったので親に遊び友達として歓迎され、初めて紅茶を飲んだのも月岡家の屋敷であった。

月岡さんと一緒に

なぎの店の娘さんでね。私の家は友達呼ぶほど立派な家じゃなかったから、月岡さんとこ、よう遊びいきました。綺麗なうちやったね。女中さんが三人もいて、お松どんに、お竹どんに、お梅どん。誰が一番上級か知りませんよ。その人らが、何でもやってくれはるから、月岡さんのお母さんなんか、奥の離れに座布団敷いて、何もせんと、じっと座ってはった。綺麗なお母さんでしたよ。

月岡さんとは、クラス違いましてね。尋常小学校には、女学校いく組と、いかない組がありましたから。なぜか知らんけど、月岡さんは女学校いかない組に入ってました。それで月岡さんとは、女学校入ってから音信不通。こっちはこっちの生活があるし、バラバラやからね。月岡さん、その後どうしたかな。

昔は、男は中学校、女は女学校いくための試験があって、受験せずに丁稚にいく人も多かった。せやから、四年生から五年生になるときに、

大手前女学校
大阪府立大手前高等女学校。大阪を代表する女学校。大阪府師範学校女学科から独立した大阪府女学校が前進。大正十二年に改称された。戦後、大手前高等学校として、男女共学になった。

受験するしないで、クラスを分けてね、私は受験するクラスに入った。当時、「別勉」ゆうのがあってね、学校の勉強以外で、別に家で勉強することね。お金持ちのところは家庭教師がきてたけど、私んところは貧乏やったから、学校の勉強を終えてから二時間は、自分で「別勉」してました。でも、兄が教えてくれたからね。八つ下の妹をかわいがってくれた。優しい兄貴でした。

女学校の受験勉強の日々

六年生の秋ごろになると、模擬試験があってね。何の気なしに受けたら一番になりました。大阪府全体の男の子も女の子も受ける高等試験で、千人も二千人も受けましたからね。先生に褒められて、「中田さん、あんた一番やったで」って。「はあ」って答えて。気楽なもんですわ。それで先生に「大手前女学校を受けてちょうだい」っていわれました。

それからは、読書は我慢してね、部屋にこもって勉強してました。

親に火鉢に炭入れてもらって、二階にもって上がって、手温めながら勉強するんですわ。兄貴と姉貴と、同じ部屋でしたからね、机の後ろを屏風でかこってね、自分だけの個室をつくって、受験勉強してました。

受験科目は、五科目くらいありましたよ。国語、算数、歴史と地理と、理科ね。理科は「アブラナの花弁が、いくつあるか」とかね。入試は三月の終わりにあって、受験番号、まだ覚えてるわ、八十番や。倍率は二人に一人ってとこですね。試験当日は、そらドキドキしましたよ。でも、淡々と受けたら、淡々と受かりました。受けなさいっていわれて、受けて、通りました、はい、いきますって。気楽なもんですよ。

うちの学校からは、他に受かった人はおらんかった。小学校から私一人だけ入ったんですよ。当時、女学校もいくつかあって、清水谷高等女学校でしょ、それから夕陽丘女学校、その他は忘れました。他の子はみんな、清水谷中学校にいきました。近くだからね。

小学校は楽しいことばっかでしたよ。尋常小学校を卒業するときは、卒業生総代になってね、免状を受け取りました。えらい名誉でしたわ。誇らしいですよ。ええ服着てね、学校へいきました。でもうちの父も母も、卒業式なんか観にこんかったんちゃう。そんな親でしたよ。

女学校時代の集合写真

女学校まで歩いて通学

大手前女学校には、昭和九年に、満十二歳で入学して、五年間通いました。大手前入っても、母親は別に喜びもしませんでした。月謝払わなあかんと思ったんちゃいますか。毎月六円払わんとならんからね。毎月六円で七十二円を五年間やから、計三百六十円や。月謝払う日の前の日には、学校の先生が袋下さいましてね、その袋に六円入れて、もって

いくんです。修学旅行費から何から全部合算されたのが、六円でしたわ。

女学校へは、空堀通りの家から三十分くらいかけて歩いていってました。うちの母親、市電なんか乗せてくれへんもん。お金かかるからね。歩きなさいいうようなもんですよ。朝は八時に教室に入らなあかんから、六時頃起きてたんでしょう。まじめな生徒ですわ。起きて朝ご飯食べて、お弁当持って、たーっと歩いて学校いってました。

当時の街は、電車なんかより市電だらけでしたよ。私の家は上本町三丁目いうところで、近くには上六っていう近鉄の駅がありましてん。当時の近鉄は大軌っていったんですよ。大阪軌道で大軌。上六から奈良まで、もう電車走ってましたよ。あやめ池遊園地もすでにあったんちゃう。で、市電でいうと、六丁目から四丁目、三丁目、二丁目、で一丁目がなくて、馬場町の次が大手前。

通学路の辺りはね、軍人さんの軍隊ばっかりですわ。偕行社いう軍人さんの学校もあったしね。八連隊と三十七連隊の基地もありま

偕行社
明治十年に陸軍軍人の集会所として設立されたことに始まる。陸軍将校の英霊奉賛と戦争犠牲者の救済、会員同士の親睦を目的とする財団法人。

学芸会での一こま

した。そばを通ると、門に衛兵が三人か四人立ってまして、馬に乗った将校がくると、「ささげー銃！　かしらー右、もとい」ってやってました。三十七連隊と八連隊。そこのグラウンドが広くてね。でも戦にはいつも負けるから、「また～負けたか、八連隊♪」って囃してました。

朝はね、八時からやったと思いますよ。で、昼まで授業やって四時間。午後は二時間くらい。一日六時間くらいの授業でしたよ。土曜日は半ドン。正午に軍隊が空砲打って、街中に「ドン」て聞こえるから、正午までの授業を「半ドン」いうてましてん。

お裁縫にお作法の授業

女学校のクラスは五十人ずつで、四クラスあり

ました。遠くからきてはる人もおってね、芦屋の精道村ゆうところのお金持ちのお嬢さんなんか、学区が違うから、わざわざ戸籍だけ寄留して、大手前まで通ってはりました。

授業は、国語、古文、漢文、英語、それから英作文。イングリッシュとコンポジションや。それと科学は、一年生のときは普通の植物で、二年生は化学、三年生になったら何やったか……。とにかく科学的なこと習いました。

お裁縫の授業もありましたね。女の子やから、週に二回、二時間ずつきっちり。それからお作法の授業もあってね。お茶運んだり、飲んだりする。あと、お辞儀したりね。先生がきっちりお礼の仕方を教えてくださった。お作法の時間が、週に四時間もあったんですよ。お裁縫も週に四時間でね。英語は大体週に二回、二時間。英作文も二時間。あと「お割烹」いうてね、お料理のことね。お割烹の時間もありました。女の子の学校やからね。

友達とツーショット

国語の先生が平野先生いうてね、一生懸命に国語、教えてくれました。ええ話しはったもん。「あめつちの〜」いう山上憶良かなんかの有名な詩を暗誦させられてね、いまでも覚えてますわ。英語もね、リーダーとコンポジションがあって、飯田先生いう先生が教えてくれはった。先生の発音よかったからね、いまでも「浜さん、英語の発音いい」いわれるよ。

成績は、わりにクラスで五番以内には入っていましたね。みんなようできる子ばかりでね。あの学校はすごかったわ。卒業したら女高師いく人とか、女専いく人とか、かなりいはりましたよ。奈良の女高師いうてね、奈良女子高等師範学校やな。私の友達の清水さんいうのは、そこにポーンと入りはったからね。女子が入学する国立は、奈良女高師しかなかったもんね。

「朕思うに」の教育勅語

式典のときはね、必ず教育勅語を読まされました。まず一月一日

四方拝
宮中で行われる一年で最初の儀式。平安時代初期に日本の宮中に取り入れられた。「四方」を「拝」して豊作と無病息災を祈った。

「四方拝」の日、それから神武天皇が生まれた二月十七日、それから、とにかく式典は、年に十日ほどありました。

校長先生がね、コート着て講堂の壇上に上がって、ご真影のカーテン開けて、お辞儀して、恭しくね、漆塗りの立派な木箱を、両手にこうもってきてね、紐を解いて開けて、「朕思うに……」というのが始まるんです。校長先生、一生懸命読まはるんです。台詞なんか覚えてしまいますね。

読んでいる間は、みんな起立して、頭を下げて聞く。頭上げたら怒られますもん。頭上げても、遠かったから、ようみえませんでしたけどね。みようとしたことありますよ、なんぼでも。

読み終わったら、校長先生が決まってお辞儀して、天皇陛下のご真影のレースのカーテンをまた引いて、天皇陛下が中に入りなさるでしょう、それで終わり。全部で三分も四分もかかりました。

照宮様さまいう今の天皇陛下のお姉さんが、大阪にきはったことあったわ。女学校の前を通ったことあった、自動車に乗ってね。私ら電車道を渡ってね、大阪城公園の歩道にぺたっと座って、「敬礼」って先生がいいはるから、頭下げて最敬礼してたら、通り過ぎ去りはった。みんなで、「みえへんかったねえ」って。

それから、イタリアからムッソリーニの娘さんの旦那さんとかいう人が、女学校にきたこともあった。親善にきたんですよ。校長先生が生徒を校庭に呼び集めてね、その人を紹介して、まぁぶちあげたのとちがいますか。イタリアは同盟国でしたからね、一生懸命応援せなあかん思いましたよ。でもいま考えたら、ムッソリーニの娘さんの旦那さん、そんな人わざわざ、女学校の校庭にまでくることないのにね。

修学旅行で日本中を旅行

女学校時代の一番の思い出は修学旅行ですわ。学年二百人、全員一緒に汽車に乗ってね、ときどきバスにも乗ったのかな、そこら辺は忘れました。そうして、ざーっと北陸回って、能登半島、あの辺は海岸あるでしょ、その辺を散歩しました。それから直江津にいっ

大洗海岸での記念写真

て、新潟まではいきませんよ、軽井沢にいって、水戸の大洗までいって、それですっと東京まで回って、二晩泊まってから、熱海にいって温泉で泳いでね、計八泊九日。

夜なんか、お布団が赤と白に分かれてるでしょ、赤と白は夫婦の布団。せやから女の子同士、新婚夫婦の物真似して、「あんた赤、あたし白」とかいって、ふざけてた思い出あるわ。

軽井沢はお金持ちがいるところだから、よくみて歩こうって歩きました。それから箱根の山で、一クラス丸ごと迷子になったこともあったわ。一クラス丸ごとやで、大騒ぎになったわ。先生が間違っていきはってね。そら知らんものね、先生も。

東京では、兄貴の龍輔が三菱化工機で働いていたから、私が東京着いたとき、友達連れて東京の街を案内してくれましてん。私の友達が、「中田さんの

石川県片山津海岸の日の出

お兄さん素敵な人や」いうてた。東京で泊まったのは、駿河台ホテル。しょうもないホテルでしたよ。

東京に明治記念館あるでしょう。そこで、明治天皇と岩倉具視さんの絵を観ましたよ。岩倉具視が病に臥してるとこでね、天皇陛下が靴のまま見舞いに上がって、岩倉具視が布団から出て、起き上がってるところの絵や。えらい、それ感激しましたわ。

初めていくとこいくとこ、のんびり旅行してました。戦争の気配なんか、あらしまへん、平和でした。春風駘蕩そのものです。二百人もぞろぞろいくんですものね。よう先生が連れていってくれはりました。

帰ってきてから発表会があったんですよ。クラスで私一人だけ名指しされてね。東京にいったときの話を、自分で原稿つくって、講堂の壇上にのぼって、学年全部の前で発表した思い出

があります。私は学芸委員だったからね。級長さんの次が学芸委員、クラスで二、三番の成績でしたから。担任から指名されてやっていました。

恐怖の教護連盟

昭和九年の九月に、室戸台風がきましてね、授業なくなったことありました。その日は市電で学校いってね、市電降りて、学校まで五〇メートルあるかないか、そこに歩くまでに傘がつぶれてしまいました。学校にやっと飛び込んだら、友達きてへんし、先生もきてはらへん。私、二階に上がる階段の踊り場から、大阪城に吹き荒れる風を、一人で見てたこと覚えてるわ。トタン板が飛んどったよ。そしたら先生に、「もう帰んなさい」言われてね。

女学校二、三年のときかな、父親の勤め先が変わって、東区の家より、もう少しましな家に引っ越しました。東野田いう、いまでいう京橋の近くにあってね、専用水道になったし、電気も従量制でね、

教護連盟
中等学校の先生方が「教護連盟」という組織をつくり、お互いに連携して、他校生徒の行動をも監視していた。

家も広なった。でも京橋の辺りなんて、まだ畑ばっかやったで。

女学校の授業が終わったら、梅田の阪急百貨店なんか、よう遊びいってました。大手前から天満に出て、ちょっといったら北浜やろ、北浜からちょっといったらすぐ梅田や。歩いてようういったわ。

でも、普通の女学生が制服で歩いてたら、教護連盟いうのがおってね、いまでいう教育委員会みたいなもんや、そこのおっさんに摘発されますの。せやから、先生に「今日は阪急の本屋に、本買いにいきます」って通知簿に判を押してもらってました。教護連盟のおっさんが声かけてきても、先生の判子みせたらＯＫですやん。

電車のなかでよその中学校の男の子としゃべっただけで、教護連盟に呼び出される時代でしたよ。草野さんいう人が、男の子としゃべって先生に呼び出されてね、えらい怒られてはった。私は女学校四年生のとき、お父さんと付き合いはじめたけど、出かけるときはサーッと私服に着替えていってました。制服着て男女で歩いて、呼び出されてる人なんかいたら、アホやなあって思ってた。

でもそういう男女の付き合い、他の人はほとんどなかったんちゃ

う。私はやんちゃやったからね。お父さんと付き合ってた。でも結婚するまで、手も握ったことないよ。一緒に歩いてただけ。

帰ったら座っている

私が女学校の四年だったときですかね、兄貴が小学校時代の友達を家に連れてきましてね。それが主人との出会いでした。「浜君が医者になったから、一ぺん連れてくるわ」いうてね。女学校から家に帰ったら、主人が座っとりました。で、なんやかんや、また生意気に質問してね。「お医者さんいうのは、どんなことするんですか」とかね。まじめに返事してくれましたよ。それからおデートするようになりました。

主人はね、心斎橋北詰の鶏の料理屋「とり菊」の息子ですわ。老舗でね、かなり有名なお店でしたわ。「うちの料理は五十銭したんや。高かってん」いうてたもんね。でも、景気が悪くなってきたから、「とり菊」は閉めてしもたらしいわ。私が結婚したときには、もう「とり菊」は畳んで、代わりにお兄さんが、下寺町で玉突き屋やってました。いまでいうビリヤード屋やね、当時流行っとったんよ。

二階建ての一階が玉突き屋でね、大きなお店でしたよ。店内にはゲームとりいう女の子がおってね、「はい二点〜、はい三点〜」って、鼻に抜けた声で、点数を数えとったわ。お客さんにはアイスコーヒーなんて出してね。あと、あの時分は冷房がないから、部屋の真ん中に大きな氷柱をぼーんと立てて、氷の中には花が入ってました。そんな玉突き屋でしたわ。

もうしょっちゅうデートしてたね。給料もらったら私の家に、デート誘いにようきはった。学校から家に帰って、二階に上がったら主人が座ってる。そんな感じでしたよ。勝手に上がりこんでてね。お母さんもサービスして、ハムエッグスなんか出したりして。そんなん食べてはりました。

そうして、よう映画とか連れていってもらいました。当時、大阪の朝日会館で、映画の試写会なんかあったんですわ。ほかにも新劇いうて、ちょっと毛色の変わった現代劇やね、島崎藤村の『夜明け

前』を劇化した、滝沢修の芝居なんかよう観にいきました。あのころはテレビもないし、ビデオもないし、ラジオくらいでしょ。だから映画観にいったり、新劇を観にいってました。

友達にはシークレット

朝日会館の上の階には、アイススケートリンクもありました。当時、流行ってましたよ。小さいころに父親と何度かいったことあります。でも主人と一緒のときはスケートなんてしません。ちっちゃいとき、こけた思い出ばっかりやからな。スケートは嫌いやった。

レストランにいったら、主人は「ソースライス」なんか、よう頼んでました。当時は「ソーライ」いうてね、ご飯にソースかけて食べてました。もうバンカラ気取ってたんやね。あと喫茶店も二人でよういきました。上六の地下鉄の駅出たところに、いい喫茶店があったんです。コーヒーとかホットケーキとか注文してました。

主人と付き合ってた頃、枚方の禁野の火薬庫が爆発して、たーんと人が死んだ事故ありました。学校から帰ってきたら、「ドーン、ドーン」って大阪市内まで遠雷が響いててね。「禁野ってところで爆発があった」って、うちの母が裁縫しながらいうてましたわ。主人の病院も禁野にあったからね、「へーほんなら、濱さんのいはる病院のそばかな」っていってた。うちの主人、患者さん連れて、あっちこっちの病院に分散させて預けながら、転々としてたみたいよ。病院の中までどんどん死体が運ばれてきてね、ムシロめくって見て歩いた言うてたわ。あれは大事件でしたね。

主人は当時、大阪市内の下寺町に、狭いアパート借りて住んでました。その部屋で、二人ですき焼きした思い出あるわ。一緒にご飯炊いて、小さな鍋買いに行って、市場に肉やら野菜やら買い出しに行くねん。おもしろかったわ。真面目な話してましたよ。浮ついた話なんてちっともせえへん。手も握ってないもん。

男の人とお付き合いしていることなんて、女学校の友達には言わへん言わへん。みんなしゃべるからね。知れたらえらいことでしょ。全然言わない。そういうことはシークレットです。

ソースライス
米飯の上にソースをかけた物を指す。当時、バンカラの食べ物とされた。梅田駅の阪急百貨店で始まったとされる。

禁野の火薬庫事故
昭和十四年三月一日、枚方市禁野にある陸軍禁野火薬庫が大爆発を起こした。約四時間、二九回にわたる爆発で、死傷者約七〇〇人、全半壊した家屋約八二一戸。

大阪府女専
大阪府立女子専門学校。その後、大阪女子大学、大阪府立大学として現在に至る。

薬専
大阪薬学専門学校のこと。現在の大阪大学薬学部。

三カ月間の会社勤め

女学校卒業したらね、お金持ちの人は、大阪府女専とか薬専とか女高師とか、上級学校に行きました。うちのお母さんなんか、そんなもん、いかしてくれるかいな。お金ないもん。でも、女学校出てお勤めに出る人も多かったよ。当時はなんぼでも就職できたもん。私は女学校卒業して十八歳のとき、近所の裁縫屋に裁縫習いにいきました。

そのころね、結婚してくれって主人にいわれたんですよ。でも私は、これからお裁縫も習わなあかんしね、他にすることもあるからっていって断ったのよ。主人は「あ、そうですか」っていって帰っていきました。あきらめのいい人やね。それから主人とは、一年ほど音信不通や。その間、主人のことなんか忘れてました。

主人はそれから、看護婦さんと付き合ったことあったみたいですよ。ネコさんいうてね、その人に接吻しようとしたとき、わっと開き直られて、「結婚してくれますか？」っていわれたみたい。で、一変に熱が醒めてね。それで嫌になったんちゃいますか。あとはもう私だけですかね。そんな看護婦さんの顔も知りません、関心ありませんよ。その点、私は何にも言いませんでしたからね。

私はその頃、お裁縫習いにいってたけどね、すぐに父親が亡くなったんです。それで働きにいかにゃならんいうことで、三菱商事に応募しました。うちの兄貴が三菱化工機に勤めてたからね、口利いてくれました。面接にいったら、じき雇ってくれましてね。あの時分は気楽なもんですよ。面接なんて課長さんとちょっとおしゃべりしただけで、すぐ雇ってもらいましたからね。

会社では、じきに友達いっぱいできてね、女の子ばっかりやけど、一緒にお昼ご飯食べて、サバ焼いたのに海苔つけたり、お櫃からご飯よそって食べてたね。仕事は事務作業。いわれたこと「はい」って、「ファイルとってらっしゃい」「はいっ」って渡してね。三カ月くらい、楽しくファイル運びやってました。でも、その後すぐ主人と結婚しました。ですから三カ月で仕事は辞めましたね。

主人のプロポーズ

ある日、会社終わって下降りたらね、うちの主人がはっと立ってるのよ。一年ぶりですよ。「あ、浜さん立ってはるわ」思うてね、それで友達にはバイバイして、二人で心斎橋歩いて、そのあと、さよならして家に帰った。そしたら母親が「今日、浜さんが結婚申し込みにきはったよ」って。うちの主人、結婚のこと母親に申し込みにいったらしいよ。で、「今、どこどこにいますから」って聞いて、会社の前までね、迎えにきたんですわ。

私には結婚しようなんて何も言わへん。普通に話してね、家に帰って母親から聞いたのよ。私はもう、「心幼くして、何も知らざりき」でねー。ほんとうにね、結婚というのがどういうものか知らんかった。主人もいつも言うてたわ。「あんたは結婚いうものがどういうものか、知らんかったなー」ってね。

うちの主人は当時、枚方の病院に勤めてて、近くの官舎に一人で住んでました。それまでは道頓堀のアパートに住んでてんけど、病院の財満先生いう人が結核で亡くなりはってね、枚方の官舎が空いたんですよ。それから、病院の小遣いさんがぱーっと掃除して消毒してね、「誰が住むか」いうことになったから、「僕が住みます」って主人が名乗り出てね。そういうところ、うちの主人、素早いんですよ。それで、自分の家ができて、一人で部屋をぱっと見渡したときに、寂しく感じて、嫁さんほしいと思ったんちゃいますか。それでうちを嫁にもらいにきはってん。

私もね、楽しくお勤めしてましたけど、ぱっと主人がきはったからね、ばたばたっと結婚しましたよ。だから三菱商事には三カ月しか働いてないのよ。三カ月でさいならーって、後ろ足でばーって砂かけたようなもんやね。働いたいうても、会社の食堂にご飯食べにいってたようなもんや。すぐ辞めて悪うございましたなんて、反省も何もあらへん。「結婚しますから」いうただけでね。みんな、あきれてはったんとちゃいますか。何のおもんばかりもない女の子ですよ。

ご家族だけでの結婚式

家族だけで小さな挙式

それから毎日、主人とは会ってました。枚方の官舎まで京阪電車でよう行ってね。ある日の夕方、自分の家に帰ろうとしたら、「もう帰んのんか」なんて寂しそうな顔して言われてね。惻隠の情いうんかな、よう帰られんかったんやな。結婚前に、初めて主人の家に泊まったことあるわ。次の日、家に帰ったら、「なんで帰ってこんかったん」って母親に言われたけど、無視しました。

結婚式なんて立派なもの、あったわけじゃないですよ。でも、玉突き屋の主人の兄さんのお家の二階でね、仏さんの祀ってある部屋で、結婚式らしいものを挙げました。仏前結婚ですね。主人のお姉さんが、ご馳走をつくってくれまして。出席したのは、私の親と兄貴と、主人のお兄さんとお姉さんと、家族だけですよ。

結婚式は、訪問着みたいな着物をちゃんと着て、神妙にやりました。その後、ガスビルまでみんなで行って、ご飯食べました。ガスビルは当時から上等でしたよ。私はもう、淡々としてたからね、「家にいて母親の愚痴聞いてるよりましや」「女中にいくよりもましや」という感じ。人生の一大事とも思いませんでしたね、ほんまに。

結婚式を簡単に済ましてからは、小さなオート三輪に箪笥やら何やら積んでね、病院の官舎まで運びました。もう物が少ない時代でしたから、兄貴と母親が日本橋に買い物いってくれましたけどね、嫁入り道具なんて、箪笥一つやっと買えただけでした。

ほんとうにお嫁入りの支度すらできなかったでっせ。あと衣桁も、二つばかり買ってきました。ほら、着物掛けるやつや。あと着物はいっぱい、母が縫ってくれていたからね。箪笥の中にたくさん詰めましたよ。そのくらいで出発ですわ。「みかん箱の上にお茶碗並べて」なんていう比喩がありますけどね、似たようなもんですよ。

ガスビル
昭和八年竣工の、大阪ガスの本社ビル。当時の大阪における最も近代的で美しいビルディングと称された。

オート三輪
タイヤが三個の貨物自動車である三輪トラック。マツダT二〇〇、ダイハツミゼットDA5などが有名。

戦争とは別世界

主人が勤めてた枚方の精神病院はね、一万坪くらいあったと思いますよ。そこに七軒だけ家があったんです。のんびりした官舎でね、ぽつんぽつんと家が建っててね。窓開けたらね森とか池とか見えました。院長さんの家なんて、松の木が植わっててね、女中部屋があって、裏に松林があって、庭には池もあって、赤い屋根の広い家でした。

最初の子供、義樹が産まれたのは昭和十六年。産婆さんに家にきてもらって、主人は隣の部屋で産まれるの待ってました。義樹が産まれたら、主人もかわいがってました。それから昭和十九年に主人が兵隊にいくまでは、平穏無事な生活が続きました。

戦争が近づいてきても、精神病院だから別世界でしたよ。八時頃に起きて朝ご飯食べて、それから主人が病院に行きはりましてね、昼は十二時頃ご飯食べに帰ってきて、一時にまた病院に行ってました。夏なんかは昼間、「暑うおまんねん」いうて、家で寝転んでましたわ。で、また一時に行って五時に帰ってきて。いい生活ですね。

ご主人、ご長男と一緒に

あの人、猫が好きでね、暇があったら猫を膝に抱いて、かわいがってました。私、猫に嫉妬してね、「私出ていくから、猫と結婚したら」って。憎たらしいことというてたもんですね。

家の裏に畑ありましてね。毎日畑、耕してました。かぼちゃ、大根、じゃがいも、菜っ葉、何でもつくりましたよ。女学校には農業の時間もありましてね、京阪の大和田ってとこに、学校の広い農園があったんです。一年生は月曜、二年生は火曜、五年生になったら金曜日、毎週一回、畑の耕し方を習ってました。

農業の先生、森田先生いうてね、いろんなこと教えてもらった。せやから私、鍬使いなんて上手よ。そうして毎日、家事と畑と、お買い物。買い物は、子供を背中に負ぶって、わっしょいわっしょい、橋渡ってね、枚方の駅の近くの魚屋さんまで三十分歩いていってました。近くに市場もなかったしね。

主人が休みの日には、奈良公園とか行きましたよ。そしたら義樹が鹿の糞を拾って「お豆さんや」いうてね。こっちは「やめてー」いうて。あんな鹿の糞を「お豆」と思って拾って食べようとするんですもんね。びっくりしたよ。哀れなもんですね。

もう平穏な日々や。「世は何もことなかりけり」やね。主人はドストエフスキーとか夏目漱石とか、本よう読んでました。私もそれに倣って、本よう読んでましたね。二人で本の話ようしたよ。あの人、文学はよう研究してて、しばらくして漱石なんかの論文書いてたんちゃうかな。芥川とかドストエフスキーもね。

ドストエフスキーがえらい好きでしたよ。『カラマーゾフの兄弟』とか『罪と罰』とか。私はドストエフスキーなんかわかりませんよ。やっぱり精神病の関係で、ドストエフスキーなんか研究の対象になったんちゃうかな。

三勇士の歌
爆弾三勇士をテーマとした歌のこと。上海事変中、敵の築いた鉄条網を突破するため、点火した破壊筒をもって敵陣に突入・突破、爆死した一等兵三名を指す。

主人の召集

「♪廟行朕の敵の陣　われの友隊すでに攻む
　折から凍る二月の　二十二日の午前五時♪」

三勇士の歌ですよ。当時、日本中で流行りましてん。盧溝橋事件に端を発して、日中戦争に発展したんですもんね。軍国主義ですから。反戦論より、賛成論の方が多かったんちゃいますか。軍人が向こうにいって一生懸命働いて、それを応援すべき。そんな素直な考えです。かわいらしいもんですよ。

ラジオでよく戦果のニュースが流れてね。新聞にも出るし。それから映画館でニュース映画いうのがありました。そこで松岡洋右外相が、国連で席を蹴立てて帰っていくニュースなんか観ましたよ。えらいニュースでしたよ。でも友達同士ではそんな話せえへん。お父さんとデートしてたときも、映画の話ばっかりや。

昭和十六年、結婚して間もなくだったと思いますよ。真珠湾攻撃

がありました。「やったー。やったー」てなもんですよ。ラジオでいってね。情報は全部ラジオ。それは大騒ぎでしたよ。日本が勝つみたいな雰囲気でしたもん。

主人は、「えらいこっちゃー」って、病院から飛んで帰ってきました。あの人が「えらいこっちゃー」っていうから、私も「えらいこっちゃー」って思いました。そこまで意識してませんけどね。ま、高揚してたんちゃいますか。日本の勝利を信じてたのかもわかりません。ようわかりませんわ。戦争なんてあったら嫌ですもん。みんな戦争は嫌ですよ。

私はね、主人は兵隊には取られへん思ってました。あの人、徴兵検査で、丙種合格だったんですよ。視力悪かったですからね。甲乙丙の「丙」。せやから当初は、兵隊には取られへん思ってた。でも、軍の教育実習みたいなのがあってね。兵隊に行ってない人でも、一カ月くらい引っ張られたときありましてん。それからは、いずれは召集はあるかな思ってました。

そしてついに召集令状がきましてね。赤紙ですよ。きたときは主

丙種合格
徴兵検査で、身体健康で頑健な者は甲種合格、これに乙種合格、丙種合格が続いた。

人、「きたぞー、ついにきたぞー」っていってね。私は「うわー」って思いました。赤い紙、私は見なかったわ。郵便屋さんが病院にもっていったんでしょうね。それからバタバタって用意して、すぐに出征しましたよ。日が決まってるからね。二、三日後だったですかね。

主人、医者やったから尉官待遇でしょ。せやから軍刀下げていかなあかん。わざわざ田積さんのおじさんと、軍刀買いに行きましたよ。三百円で、切れもせえへん、安物の軍刀。あんなしょうもないこと、なんですんねやろな。軍刀くらい、軍で支給してくれたらええのに。

大阪のね、空心町いうところがありますねん。北浜のちょっと東の方。そこの小学校にでも集合して。私も見送りにいきました。「チャッチャカー、チャチャカ、チャカー♪」って出征の音楽が流れててね。物悲しい音楽やね。そりゃ悲しいですわ。「これ、今生の別れなり」いうところですね。でも「行きません」いったら引っ張られますもん。牢屋に入らなあかん。

空心町には、みんな見送りにきてました。広いところに兵隊さん

尉官待遇
尉官とは、大尉、中尉、少尉からなる軍隊階級。医師は尉官として遇された。

が並んでね。おはぎもって見送りにきてる人もいました。私らは、おはぎつくる材料もないし、何にもないでしょ。だから何ももっていけません。哀れなもんですよ。

主人は、「義樹だけ大事にして。障子破らせんようにな」って言ってました。あの子よく障子破ってたんや。「だぁー」ってね。それからは、義樹と私とうちの母との三人暮らしですわ。畑してね。その後、中国から、「ビルマに行きます」って手紙がきました。

出征直前のご主人と

ジリ貧の生活

どんな思いで暮らしたか、もうわかりませんわ。毎日、泣きの涙で暮らしてたわけでもないしね。主人が召集されてからはね、家におってもしょうがないでしょ。義樹は二つか三つですし、おばあちゃんが面倒みてくれてましたから、私は工場で働き出しました。

当時、二十五歳までの女の人で暇な人は、軍需工場で働かないかんっていう、それも召集みたいなのがあったんです。私も、そのときまだ二十五歳になってませんでしたから、そやけど、軍需工場なんかで働かされたらたまらんでしょ。そやから、近所の水谷さんいう工場のある家に、「雇ってください」って頼みにいってね、働きにいきました。

水谷さんの工場、潜水艦のろ過装置とかつくってたんです。そんなん実際、役に立ってるかわかりませんよ。せやけど工場には四、五十人が働いていました。私は事務所でね、集計的な仕事をしてました。それからはずっと、朝九時から夕方三時か四時頃まで、戦争終わるまで、工場で働いてました。昼ご飯は、軍から配給があってね。まあ大したおかずはなかったけど、豆ご飯よう食べました。それで一食助かりました。大事なことでしたよ。

私らは畑をしてたからね、主食には困りませんでした。でも、副食が不自由でしたね。宇和島にある夫の兄夫婦の実家から、ジャコも送ってもらいましたけど、たんぱく質が足りませんでした。それ

でも、工場から人が出征したりするときなんかは、壮行会開いてね、鶏つぶして、すき焼きもしました。田舎だから、鶏飼ってる百姓さん多いもん。何かあると鶏つぶして食べてました。

京阪電車で、枚方から交野線いう支線が出てましてね。中宮の次の駅に、村野いう駅があるんです。そこのお百姓さんの家に、ようお米分けてもらいにいってました。いつも着物と米、交換してもらうねん。そしたら、そのお百姓さんの奥さんが、嫌らしいこと言ってね。「もう着物いっぱい換えことしましたからね、着物はいりません、お金がよろしい」ってね。あのおばさんの顔、一生忘れられませんわ。

だんだん、ものが不自由になってきてね。ジリ貧でね、かぼちゃの数、数えたことあるわ。机の上に置いて、「一個、二個、三個……。あー、これで何日食いつなげるわ」って。お魚の配給も、四十九日間なかったことあります。うちの母親が言ってた。「魚、四十九日食べてなかったな」って。ジリ貧で、次第に闇が横行しましたよ。うちの家にくるんです。「奥さん、お米いりませんか」と

かいってね。人間って、どんなに厳しい状況になっても、たくましい思うわ。

闇はたくさん利用したよ。工場にはマツタケも売りにきました。「これをみんなで分けて食べたら、何日間かおいしく食べられるから、高い買い物ではないよ」って。栄養にもならんのに、「あー、そういう考え方もあるかな」って思いました。買わんかったけど。

隣組と千人針と

当時は、もんぺ必ず履いてました。世の風潮でしたから。着物も長い袖なんてものじゃなくて、筒袖。そやから、木綿のかすりの着物をつぶしてね、全部自分で縫って、おもしろい格好でしたよ。みんなそんな格好してました。それから、着物は着たまま寝てました。いつ空襲あるかわかりませんから、夜中でもすぐ出られるようにね。

もう食べて寝るだけで精一杯。娯楽なんてありませんよ。ラジオなんて、「大本営発表。何々を撃退せり」言うてね。「どこどこから

脱去せり」って、そればっかり。アメリカ軍が攻めてきてね、日本が反撃して追い払ったら、「脱去せり」なんていって。そんな偉そうな放送ばっかりでしたよ。まったく偉そうにね。驕り高ぶったもんですよね。そんなの嘘ですよ、みんな。

隣組いうのもありました。「♪とんとん、とんがらりっと、隣組。格子を開ければ、顔なじみ。回して頂戴、回覧板、知らせられたり、知らせたり♪」。この歌、誰がつくったんかな。そうや、岡本一平や。有名な芸術家の、ほら、岡本太郎のお父さん。

でも、隣組の活動ったって、いまの自治会みたいなもんですよ。下の集会所に集まって、なんか話を聞いたりね。私らは病院の官舎にいたから、自分たちでは組織しなかったけど、宮の坂の集落で、隣組に入らせてもらいました。

消防訓練も、バケツリレーもありました。でも、一ぺんか二へんでしたよ。竹槍みたいな物騒なものはなかったよ。銃後の守りを固める「国防婦人会」なんてのにも入ってなかった。「国防婦人会」なんて、物々しいもんですね。

隣組
五軒から十軒の世帯を一組として、戦争動因や物資の供給、配給、防災訓練などを行なった組織。敗戦後、GHQにより解体された。

国防婦人会
大日本国防婦人会。昭和十七年に設立された婦人団体。白い割烹着にタスキ掛けの姿をユニフォームとし、「国防は台所から」をスローガンとして掲げた。

防空壕は、病院の患者さんに頼んで、玄関の横に穴掘ってもらいました。畳二畳敷きくらいの広さで、病院の山から松の木切って運んで、柱にして。屋根葺いて、中に布団敷いてました。防空壕の中に入るのおもしろかったよ。遊んでたわ、防空壕で。

千人針は、ようやりました。表出るとね、おばさんがいっぱい千人針もって、自分の家族のために「お願いします」って言ってね。筆のお尻に朱肉つけて、こんな白い布に、ポンポンポンと押して、それに一つずつ千人が縫うんですよ。兵隊さんにそれ持たせて、弾が当たらんようにするんですね。「♪千人針の 人の数 心を込めて運ぶ針♪」って『千人針の歌』も、ラジオでよう流れてました。でも私はね、主人の千人針しなかった。そんなことにすがる気分じゃありませんでしたし。

主人の船が撃沈

病院の人に、「主人がビルマにいってます」言うたんです。そし

たら「ビルマは危険なとこやから、先生あきまへんな」って言われたことありました。もう腹立ちましたよ、でも不安でした。主人にもしものことがあったら、病院の官舎からすぐ出ていかなあかんしね。うちの兄貴が「何かあったら僕が面倒見る」いうてくれてたから、そのときは兄貴に頼るつもりでした。

主人から手紙は、たまにきましたよ。手紙を受け取ったときは、嬉しかったですよ。生きてるんだーって、もう飽かずに読みふけりました。いまでも残してるくらいやからね。「飽かず眺むる」ですわ。でも、あくる日死んでるかわからないし。毎日眺めてね、毎日、涙流しながら読んでましたよ。主人が出征する前の背広がね、洋服ダンスにかけてあったんです。移り香が懐かしくてね。時々匂いかいで、主人との思い出、懐かしんでました。

主人はね、昭和十九年の六月に出征して、広島の大竹港から、吉野丸いう船に乗って、フィリピンに向けて出航したらしいです。日本とフィリピンの間に、深さが一万メートルあるバシー海溝いうのがありましてね、そこで船が撃沈させられました。

飽かず眺むる
シューベルト「野ばら」の歌詞。音楽が好きだった義雄はバイオリンを弾きレコードをよく聴いた。「野ばら」をドイツ語で歌い栄子にも教えた。

吉野丸
昭和一九年七月三一日、台湾・高雄よりフィリピン・マニラに向け航行中、バシー海峡で潜水艦の魚雷攻撃に遭い沈没。兵員二四四二名、船砲隊一八名、船員三五名が戦死した。

配属先ビルマでの義雄さん

海に放り出されてね、一生懸命筏に摑まって、十六時間、海の上に漂っていたそうです。船に三千人くらい乗ってたのが、助かったのは半分の千五百人くらい。若い子がたくさん死んだらしいよ。

ビルマではね、実際のドンパチはなかったみたいです。軍医やったけど、けが人もそうおらへんし、猫かわいがって、普通に暮らしてたみたいですよ。引き上げてくるときは、捕虜になりましたけどね、イギリスの捕虜やったから、非常に紳士的やいうてました。アメリカは怖い、ソ連だとシベリアに連れていかれた、それと比べてよかったって言ってました。でも戦争の話はあまり言わへん。思い出すのも嫌みたいでしたわ。

しあわせの着物

戦争に負けるっていうのは、B29が成層圏の上を飛び回るようになってから、ずっと思ってました。B29は、日本の空を席巻してましたよ。すごいね、アメリカなんて。

「あんなすごい飛行機飛ばしてる、アメリカには負けるね」って独り言でいったら、工場の人にえらい怒られましたね。「そんなこと言ったらあきまへん、反戦思想や」って。それ言われて、私は黙ってたんとちゃいますか。そんなん議論するほどの根拠もないし、「そうですか」で済ましたんちゃう。でも、そういうこと、言っちゃいけない雰囲気はありましたよ。常識のある人は、みんな察してたんやと思います。私は常識ないから、口走ったけどね。

一回、機銃掃射に撃たれそうになったことあったわ。買い物いってたらね、橋の上で、B29が機銃掃射バリバリっと撃ちよってん。当たらんかったけど、怖かったですよ。

空襲警報は、しょっちゅうありました。サイレンが鳴ってね。「敵機はどこどこにあり」ってラジオで言うねん。電灯の周りを黒い布で覆って、光が漏れないようにしてました。

大阪市内では、みんな空襲に備えてね、大事なものをそごう百貨店の地下に預けにいってました。当時、大阪のそごうの地下二階に行くと、そういう物を預けるコーナーがあったんです。私は枚方に住んでたから、何も預けてませんよ。でも玉突き屋やった主人の兄の、田積さんのお嫁さんなんかはね、だんなの背広とか、大事な着物とか、預けてはりました。

紗の模様が入った、夏物の薄い生地の着物があってね。田積さん、その着物預けてはったわ。裏にちょっと模様があって、表にすーっと透けてみえる、紗の合わせ模様。「紗の合わせ」やから「しゃーあわせ、しあわせ」ってね。それで、「しあわせを預けてきた」って田積の姉さん言うてました。でも田積姉さんの家も、空襲で焼けましてね、その後、一家で四国の宇和島に行きはりました。「しあわせ」なんてそんなもん、どうなったんかな、姉さんのあの着物。

大阪大空襲

大阪に本格的な攻撃がはじまったのは、終戦のちょっと前でした。昭和二十年の三月の日の夜中から朝にかけて、大阪大空襲ですよ。

病院の官舎から空を見たらね、大阪方面の空が、パーッと赤くなっ

てるんです。枚方の家からちょうど、東南の方向の空が真っ赤になって、燃えてました。飛行機がぼんぼん通ってね、「あー、大阪が燃えてる」って思いましたよ。田積さん一家が市内に住んではったから、「大丈夫かな」って心配でした。

そしたら次の日、田積さん家焼け出されてね、電車に乗って布団担いで、憐れな格好でうちにきましたよ。うちしか頼るとこなかったんやろうね。「焼け出された。一晩、御堂筋で寝た」言うてね。もう、「よく無事やったねー」って。そうして戦争被災者ってことで、証明書を発行してもらいに、次の日、京阪電車に乗って、また大阪の街に行きました。あんなときでも電車は走っとりましたよ。昼間やから怖くはなかったです。空襲は必ず夜でしたから。

大阪はね、もう焼け野原やった。綿屋町にあった田積さんとこの玉突き屋も焼けてしまってね。台所にお釜だけが残ってました。それぞれの家の焼け跡には、蔵だけ残っててね。一つの蔵が熱せられて、バーンと破裂するの見ました。

周りの家がみんな燃えるでしょ。蔵が最後まで残るでしょ。それで段々と遠火で焼けて、蔵の中が真っ赤っかになって自然発火して、ほんで屋根がバーンって飛んで、蔵が燃え落ちるのを実際に見ました。一軒だけ残ってる蔵がね、ついに燃え落ちたっていう、なんや大阪城の終焉を見たような気がしましたよ。

田積さんとは一緒に公民館に行きました。家燃えたし、証明書も発行してもらわなあかんし、事後処理ですか。私はただ、オブザーバーとしてついていっただけですけどね。そうして公民館入ったら、帰るときね、長靴が盗まれとったんです。もうみんな殺気立ってたんだろうね。哀れなもんやね。下駄履いて帰りましたよ。靴が盗まれた、鮮明な記憶や。

自宅で聞いた玉音放送

昭和二十年八月十五日の午前中やね、ラジオで、「正午に重大放送がありますから、みんな心して聞くように」って言われました。「重大発表って何やろう」って思って、家で正座して待ってましたよ。

戦争が終わるとか、そんなことはなーんも考えてへんかった。そしたら、ザーザーザーいうて、聞き取れませんでした。天皇陛下っていうのもわからんかった。なんかおかしな、うにゃうにゃごにゃごにゃ言うてんねん。わけがわからんかった。

「玉音放送」ゆうねん。後で知ったことや。その放送の後に、ちゃんとした説明が続いてね、うちの母と妹の富子と私、三人で聞いとりました。その解説みたいなので、初めて戦争が終わったいうのがわかったんよ。そりゃー、嬉しかったよ。「お父さんが帰ってきはる」言うて、絶叫したん覚えてるもん。けどあの人も、もう死んでるかもわからんかったけど。

畑してたらね、ラジオから藤山一郎の歌が聞こえてきて、感激したん覚えてるわ。「あー藤山一郎やー」ってね。ええ声でしたわ。そんなん久しく聞いてなかったから。

聴き手：盛池雄歩
聴き取り日：平成十八（二〇〇六）年二月二十八日・二十九日

藤山一郎
一九一一年～一九九三年。国民的歌手、声楽家、作曲家。「酒は涙か溜息か」「丘を越えて」「青い山脈」など多数のヒット作を持つ。

このたびの取材で濱さんからお借りした写真の中には、当時の文化や生活の様子が写されたものが数多くありました。本文中で掲載できなかった写真のいくつかを、ここで紹介致します。

義雄さんの出勤はスーパーカブで

子供たち凧上げをする

餅つき――正月が近づくと、どの家の庭先にも見られた光景でした

どこかに遊びに行くのでしょうか？　後ろにオート三輪が見えます

義雄さん――フラフープが大流行した昭和 33 年

ポーズをとって

聴き取りの記録④
高久　浩さん（89）

高久　浩（たかく　ひろし）さんの来し方

大正五（一九一六）年九月十日、秋田県湯沢市生まれ。
D製鋼に入社後は、特殊鋼の営業一筋。戦争中は、召集令状こそ来なかったものの、特殊鋼を扱う仕事ということもあり、半ば徴用に近い形で、軍需省関係の仕事に従事。敗戦後の大不況の中でも、営業に全力。
しかし働き盛りのさなか結核に倒れ、療養生活も経験。再び特殊鋼の世界へ。社員に慕われ仲人を何組も。

私の小学生時代からの友人のお父上からお話を伺いました。

戦中戦後の過酷な時代を仕事一筋で、時には身を投げ打ってという思いもあったことでしょうに、穏やかに語られるご様子に、今の日本の繁栄の基礎を築き上げられた誇りを感じました。平和と言われる中で生きている私たちは、何か「お返し」ができたんだろうか、とふと考えてしまいました。同僚に慕われ、仲人も幾組も、高久家から彼らの笑い声が聞こえるようです。

（副枝）

召集令状は来なかったが・・・

――戦争中のことからお聞かせください。召集令状は来たのですか。

高久　来ませんでした。甲種合格（徴兵検査）ではなかったんです。戦争が激しくなると、誰にでも召集令状がきたんですけれど。

私の勤めていた会社が、特殊鋼を製造していたんです。この特殊鋼は、兵器の材料に使われていたんですね。ステンレスも特殊鋼なんです。そんなことで軍との関係が強かったんです。飛行機のエンジンの材料だとか、機関銃なども特殊鋼で出来てるわけですよ。当時、陸軍航空本部、海軍航空本部が、工廠といって工場を持って、そこで作っていたわけです。ところが、そこだけでは間に合わなくなって、民間でも飛行機を作るようになったんですね。そして、飛行機の重要性が理解され、欧米に追いつけ追い越せの増産体制にはいり軍需省ができたんです。それまでは、別々になっていた、陸軍と海軍の航空本部の生産部門が統合され、一本化されたんです。

最初は、日本の航空機はとても優秀だったんですね。スピードが

甲種合格（徴兵検査）
戦前の日本においては、二十歳に達した男子は誰もが徴兵検査を受けることが義務付けられた。四月～五月頃に通知が届き地域の集会所や小学校で検査が行われた。検査に合格した者は翌年の一月十日に各連隊に入営する事となる。尚、徴兵検査は二十歳以上は義務となるものの、十七歳から志願によって入営することが出来た。身長、体重、病気の有無等、合格し即入営となる者は合格区分が『甲種合格』というが、甲種合格の目安は身長一五二センチ以上で身体頑健なことであった。

あって、小回りがきいたんですね。スピードがあるとどうしても大きな円になってしまうでしょ。ところが、日本の飛行機は、小回りもきき、戦闘には有利だったんです。ところが、アメリカも研究したんでしょうね、だんだん優秀になってきた上に、量産でしょ、かなわなくなってくるんですね。一つの海戦が終わると、前線から、改良の連絡がくるんです。すると、軍需省から、変更の指示がくるわけですね。素材を作るのは、ほとんど民間なんです。素材といってもいろんな形があるわけですね。例えば、シャフトだとかプロペラ軸だとかですね。型に特殊鋼を入れて、ハンマーでたたいて素材を作るんです。ですから、図面をひいてそれで走っているわけですから、パッとは変われないんですね。しかし、緊急を要しているわけです。会議をしてどこの会社に作ってもらうか、ということを私たちはやっていたんです。

――常時、それに関っていたのですか。

高久　その必要があるときに、軍需省から、私の会社に「高久を出してくれ」と連絡が入るんです。当時、私は、東京支店にいました

特殊鋼
鉄に炭素以外のさまざまな元素を加えた合金鋼のこと。添加する元素によって、硬度、強度、粘り強さ、耐摩耗性、耐熱性、耐食性などの特性が増す。たとえば、ニッケルを加えると粘りと強度がアップし、モリブデンでは高温での強度、硬度が増す。また、銅を加えると耐食性が増す。

から、支店長命で、私は、行くわけです。そうすると、一週間ぐらい缶詰にされるんです。そのうち東京は、空襲が激しくなってきましたので、温泉地で、ほとんど徹夜で会議をするわけです。内容が決まると各メーカーに連絡をして、変更してもらうんですが、急いでいますので、軍需省の人と一緒にメーカーを回りましたね。ですから、徴用されたのと同じでしょうか。

――それでは、空襲にあったこともなかったんですか。

高久　怖い思いをしたことは、一回あるんです。その時は、銀座の松屋の隣に明治屋がありまして、その上が営業の職場だったんですね。ちょうど、同僚と二人で、宿直だったんです。最初、四丁目の角のビアホールに、焼夷弾が落ちたんです。書類を地下に投げ入れていたら、警防団の人が来て「危ないから逃げろ！」と言うんですね。二人でいましたからね、相手の人が、気が付いたんですね、僕は、気がつかなかったんですけれど、お鍋の中に、ご飯があったんですよ、それをね「高久さん、何時食べられるかわからないから」と言って、紙でそのご飯をくるんで持って逃げたんです。外へ出たら隣も

軍需省
太平洋戦争期に設置された日本の行政機関の一つ。戦時の軍需産業強化のため一九四三年十一月商工省の大半と企画院を統合して設置された、軍需会社を所管した。

焼夷弾
爆弾・砲弾の一種で、攻撃対象を焼き払うために使用する。焼夷剤としては、主にテルミットや油脂、黄燐の他にも重油などが用いられている。

警防団
第二次世界大戦中の昭和十四年（一九三九年）に主に空襲や災害から市民を守るために作られた団体である。昭和二十二年（一九四七年）に廃止され、消防団に改組された。

燃えていて真っ赤なんですね。上からは、焼夷弾が、ひゅーひゅー音をたてながら落ちてくるでしょ、人間ておもしろいもんですね、塀に張り付くんですね。上から落ちてくるんですから塀に張り付いても何にもならないんですけれどね。後で同僚と笑ってしまったんですがね。銀座の通りを火が走るんです。少し逃げては様子を見、また逃げて、歌舞伎座も焼けましたしね。逃げて、逃げてとうとう隅田川のほとりまで来てしまいました。帰りは、とぼとぼと焼け跡を見ながら帰って来たんです。日比谷の横の通りが、木れんがなんですね。それに焼夷弾がささっているんです。危ないですよね。それが唯一の空襲体験でした。こんな思いは、誰にもさせたくないですね。

ご兄弟と一緒に

――つらい思いをするのは、始めた人ではなく、私たちですものね。

高久　そうなんですよ。私たちは、この戦争は勝てないだろう、と思っていたんですよ。と言うのはね、私の勤めていた会社の技術屋さんたちが、設備購入のため、戦争が始まる一年半くらい前だったでしょうか、一ヶ月半の予定で、アメリカへ行ったんです。

この時すでに、芳しくない空気だったそうです。そのアメリカの機械工場を訪問したときに、何時帰るのかと聞かれ、一ヵ月後と答えると、帰りに寄れば、ここに新しい工場が出来てるからと言われたそうなんです。半信半疑で帰りに寄ると、大きな立派な工場ができていたそうなんです。しかも、機械も入って稼動していたそうなんです。びっくりしたと言っていましたね。当時、日本にはまだない、ブルドーザーがあったそうです。工場の骨組みもすべて規格で、量産し、在庫しており、ブルでどんどん整地、造っちゃうんですね。そういうのを、目の当たりにした技術屋さんたちは、帰国してから、私たちに、設備も技術も日本はかなわないから、戦争したら勝てっこない、と言っていたんです。ですから、私たちは、戦争にならなければいいがなー、と仲間内では話していました。

――でも始まってしまって、軍の仕事をしなければならない。

高久　そうなんですね。私たちは、海軍省にも出入りしていました。

高射砲
上空にいる敵航空機を撃墜するために作られた火砲。旧日本陸軍では高射砲、旧海軍では高角砲と呼んだが、同じものである。

ある日、私が海軍省のMさんを訪ねたとき、いつものお部屋にいらっしゃらなかったんですね。お尋ねしたら、別の部屋にいますよと言われ、そちらに行ったんです。ドアをノックすると「どうぞ」とMさんの声がするものですから開けたんです。Mさんが、「あっ」と言う顔をし、私を見たんです。

部屋の中にね、ウイスキーの角瓶なんかいっぱいあるんですよ。「見られちゃったな」とMさんが、にこにこしながら「よかったら分けてあげるよ、ただし、実費だよ」。私のほうも好きな連中はいっぱいいますし、物のないときでしたからね。「空壜だけは、必ず持ってきてくれ、引き換えにまた渡すから」と言うんですね。これはあげるからと、いろいろな缶詰を沢山貰って、帰って来ました。会社では大喜びですよ。支店長も課長も「早速今晩飲もうか」ってね。とにかくね、何でもありましたね。

同僚が召集されて、立川の高射砲の部隊に配属されたんですが、そこで、陸軍の機体を作っているO製作所の資材係長が「高久」を知っていて、その係長と同僚が親しくなったんです。ある日、その係長から、連絡があって、大きな鞄と風呂敷を持ってくるように、と。そこで、課長と私は行ったんです。そしたら「やー、せっかく来てもらったんだけれど、急に、これから会食があるんでごちそうできなくなってしまったんだよ、せっかくだから、これだけ食べていきなさい」って、缶詰のパイナップルを出してくれたんです。そして、銀紙にくるんだチョコが沢山入った箱を二つ鞄に入れ、風呂敷には、飴が入った缶を包んで、重かったですね。「表門から出るの」と聞いたら「いや、裏門から出てってくれ、そこまで送るから」と、ついてきてくれたんですけれど、向こうから、週番下士官が来るんですね。あっと思いましたが、見ない振りするんですね。それはね、我々を送ってくれた人たちは、兵糧関係の仕事をしていたからじゃないでしょうか。そんなことで、甘いものには不自由しませんでしたね。チョコレートなんて当時口に出来なかったんですから。

仕事の関係で、知っていたその係長が、一週間に一度、部隊資材の調達に来るんですよ。私が居ても居なくても、甘いものをどっさり置いていってくれるので、おかげさまで、ご近所に配ったりして

喜ばれました。私はまだ独身でしたから、会社の女性にもてましたね。昭和十八年ぐらいです。

――戦争中は、軍の受注が多かったということは、景気はよかったんですね。

高久　そうです。軍の要求に応えられないくらいでした。艦政本部の臨時資材部から呼び出しがあって、私が行ったんです。若い中尉さんでしたけれど、「これをやってくれ」と言われたんです。「筋を通してもらわないと出来ません」と言いましたら「お前は話のわからん奴だ。大事な日本の軍の話だ。おまえの一存で断るとは何事だ」と。「いえ、私の一存ではありません。国が決めたことですから誰に聞いてもらっても、答えは同じです」と言いましたら、怒りましてね、軍刀を鳴らしましてね「貴様、それでも日本人か！」と大声を張り上げたんです。その声を聞きつけたS少将が来て、中尉に「どうした」と事情を聞いたら「こいつがいうことを聞かない」と言ったんですね。少将が私に「どうしました」と聞いたものですから、事情を説明しましたら、中尉に向かって「君が間違っているよ」と言って、その場は事なきを得たんです。

戦後、その中尉だった人が、会社に来て、「鉄板を分けてくれないか」、と言うんですね。「分けてあげたいのは山々ですが、これも切符がないとだめなんです」。そんなこともありましたね。今頃、どうしておられますか。

結婚、そして終戦

――ご結婚のご縁は？

高久　私が、おじ夫婦に世話になっているときに、隣組に彼女がいたんです。と言っても、私は、勤めていましたから、昼間はいないし、口をきいたわけでもないんです。おじ夫婦や私の一番上の姉からも、身を固めたら、とは言われていたのですが、戦争中で、どうなるかわからないからと、うっちゃっていたんですね。そのうち、会社でも、支店長からも「高久君、結婚しないか」と言われたりして、そうそうほっとくわけにもいかなくなり、彼女と会うことにしたんで

もんぺ
袴の形をして足首のところでくくるようにした、ももひきに似た労働用の衣服。主に農山村の女性が用いる。

国民服
国民が常用すべきものとして昭和十五年（一九四〇）制定され、第二次大戦中、広く男子が着用した軍服に似た衣服。

ゲートル
すねの部分にまいて歩きやすくするもの。すねにあてるものを脚絆（きゃはん）といい、筒状のものや、帯状の巻き脚絆がある。

す。演舞場で前進座のお芝居をしていたんですね。それを、従姉妹がセッティングしてくれました。従姉妹が縁結びのようなものです。

それに家内の母が、娘にはどんな貧乏にも苦労にも耐えられるようにしこんでいます、と叔父夫婦に言われたことを聞いて、結婚することに決め、家内の母親に一切を任せて、東中野の日本閣で式を挙げました。

――何年でしょうか。

高久　昭和十九年です。時代が時代でしたので新婚旅行なんて、とも思いましたが、箱根に二泊でしたけれど、行きました。女性はもんぺ、男性は国民服にゲートル巻いて、という恰好でしたが、一応新婚旅行でしょうか。箱根湯本に着くと、木炭自動車でした。場所柄でしょうか、傷病兵が、ぞろぞろ歩いているんですね。私たちは、頭の下げっぱなしでしたね。

――知り合いでなくとも、傷病兵に会ったら、頭を下げるのですか。

高久　そうですね。頭は下げました。大勢いるとたいへん、下げっぱなしです。もし、知らないふりなんかしましたら、怒られましたよ。

家族旅行の思い出

確かに、ご苦労なさった人たちでしたから、頭を下げるのは、当たり前だと思っていましたね。

――昭和十九年といいますと敗戦色も濃くなって・・・・。

高久　まだ空襲が激しくなる前ですから、勝たなければ、という気運は、あったんですが、私たち会社の連中は、「これはもう・・」と、元気がなかったですね。航空機の事なんかをやっていますと、負けたから、ここをこうして、と言う話ばかりでしたからね。新聞やニュースなんかでは、戦果があった、と言う話ばかりでしたね。

丁度この子（美智子―長女）が生まれる前も、私は、伊東温泉で、会議をしていたんですが、食べ物、飲み物、甘い物でも辛い物でも何でもあるんです。軍というところは、何でもあるんですね。

家内は、出産が近づいてきたので、お茶の水の三楽病院に入院し、私はまたすぐに伊東に戻ったんですね。そして、三月の九日の夜に、叔母から電話があって明日の朝あたり生まれるかもしれないから、最初の子だし病院にいらっしゃいと言われ、休暇を貰ったんです。翌朝小田原まできたら汽車が動かないんです。乗客に降りてくれ

と言うんですね。流言飛語と言うんでしょうか、「東京が、夕べ空襲にあって全滅した」と言う話が伝わってきたんです。「えっ」と思いましたよ。確かに、昨晩は、伊東でも空襲警報が鳴ったんですけれど、何事もなかったですから。二時間半ぐらい待ったでしょうか、また出るというので乗って、大井町まで行けました。そこからは線路伝いに品川まで歩いて山手線に乗って会社がある新橋まで行ったんですが、何ともないんですよね。「あれっ」と思ったんですが、だんだん東京駅に近くなってきたら煙が見えてきました。私は、御茶の水で降りて、やっと病院へ着いたんです。私の上司の課長が、荻窪に住んでいたんですけれど、電車が止まったので歩いて、お茶の水の病院へ、家内を見舞ってくれていたんです。ですから、この子（美智子）が最初に会ったのは、父親でなく課長だったんですね。

その病院の廊下には、やけどや怪我をした人たちが沢山いましたね。後から家内に聴いた話なんですけれど、病院中大変な騒ぎで、産むのをがまんして、と言われたそうです。看護婦さんたちの宿舎

も焼けたそうです。

私は、今の特許局の裏のほうに用事があって、もちろん周りはずいぶんと焼けていたんですが、そこで空中戦を見たんですよ。からん、からんって薬莢が落ちてくるんですよ。B29に体当たりをしようとした飛行機が打たれ、落ちていく中からパラシュートで脱出したんですが、開かなくてそのまま落ちていく様子なんか見ましたよ。そうかと思えば、体当たりに成功すると、拍手喝采したりね。でも戦争は、いやですねー、悲惨ですね。

――終戦が近づくにつれお仕事のほうはどうでしたか。

高久　終戦の年、やっと家族は山梨の谷村町に疎開したんです。荷物はほとんど焼けてしまったんですがね。

私は、軍需省の人と一緒に、各メーカーを廻っていたんです。途中で空襲にあったりもしながら、帰りは、山梨へ寄ってから会社へ戻ろうと思って、疎開先の山梨へ行ったんです。そしたら、その翌日が終戦になったんです。

――玉音放送は、何処でお聞きになったのですか。

高久　その山梨で聞きました。
――どう思われました？
高久　あまりよく聞こえませんでね。でも、終わったということで、正直なところ、ほっとしましたね。とにかく、いい話は、何処へ行ってもなかったですからね。メーカーは一生懸命やっているんですけれど、能力が減っていくんですね。工場が破壊されたり、人が召集されたり被災したりしてますんでね。軍のほうは、もっともっと資材が欲しかったんでしょうが・・・。

経験させたくはないが知ってほしいこと

――終戦になって、お仕事は？
高久　私たちが作っていた特殊鋼は、ほとんど売るところがなくなってきたんですね。そこで会社も、人員整理を始め、約五分の一になったんです。ひどかったですよね、仕事がないんですから。私は、営業でしたから、何か売っていかなければ、生活がありましたから

高久さんご夫婦・若い社員たちと

ね。電気パン焼き釜、鍬、シャベルなど作ったんですよ。ところが、形だけではダメなんですね。使い勝手というのがありますからね。
――その原料となる資源は、どうなさったんですか。国産ですか。
高久　スクラップだったんです。電気炉で溶かして、用途に応じニッケルを混ぜたりして、日本は資源がありませんからね。
――新しく作ったものの営業をしていたのですか。
高久　そうです。当時は、家で夕食をほとんど食べたことはなかったですね。子どもたちが、うちのお父さんは帰ってこない、と言っていると家内から聞かされました。少しでも多く売らなければと、足を棒にして営業にまわりましたね。戦争中に、バネ材を国鉄に納めていたのですが、軍の要求に応えていくうちに、国鉄に納められなくなってしまったんですね。戦後、その国鉄から、戦争中、協力してくれなかったと、なかなか買ってもらえなかったんですが、あの手この手と、今だったらニュースになるようなこともしましたね。
――高久さんは、D製鋼で特殊鋼一筋でこられたんですね。
高久　ところがそうでもないんです。疲れが蓄積していたんでしょ

う、風邪から肺炎になり、治りきらないうちに仕事をしたりして結核になったんです。当時は、ストマイが二万七千円、給与が万にいってなかった時代ですからね。高かったですねー。会社を休職し、私の療養生活が始まりました。家内の着物が、薬代に消えてしまいましたね。そのうち、大きな労働争議が始まり、長い間欠勤していました私は、退職しました。

――戦中、戦後、物のない中、大変な思いで、仕事に家族にと生きてきたんですよね。

高久　そうですね。経験はさせたくないけれど、こういう思いをしてきたという事は、知ってほしいですよね。

聴き手：副枝志保子

聴き取り日：平成十七（二〇〇五）年十月三十日

ストマイ
ストレプトマイシンの略。ストレプトミセスの一種から得られる抗生物質。特に結核菌に有効で、以前は結核治療薬として用いられたが、難聴などの副作用がある。

聴き取りの記録⑤

冨田夏子さん（89）

冨田夏子（とみた　なつこ）さんの来し方

大正六年七月二十八日、京都府の加茂川のほとりで生まれる。
慶應義塾大学の医学部創設の為に父、加藤元一が京都帝大より呼ばれ、
三歳から東京信濃町に移り住む。関東大震災は信濃町にて被災。
四谷第二小学校から雙葉小学校に転入し、雙葉高等女学校に進む。
女学校四年生の時に、父、元一の研究の弟子、冨田恒男と許婚になり、
女学校卒業後十九歳で結婚。

祖母の話しは、大学時代から十年以上同居をしていたのに、知らないことばかり。今回は、結婚する昭和十一年までをまとめました。何不自由なく育った祖母の生活は、現代とのギャップを感じさせません。そして、だからこそ、その数年後に突然起こる戦争の恐ろしさを、ひしひしと感じます。今回の聴き取りを機に、曾祖父の書いた本を手にしました。ついニヶ月前に亡くなった祖母の弟、大叔父の机の上から拝借しました。医学の道に進み、曾祖父の研究を一番よく知る大叔父。「おい、あと二ヶ月早く、俺の話しも聴いてくれればよかったのに」。そんな声が、本に挟まった沢山の付箋から聞こえてくるようでした。（冨田）

慶應病院
大正九年（一九二〇年）慶応義塾大学医学部、及び、大学病院開設。初代医学部長及び病院長は北里柴三郎。

京都帝大
現、京都大学。明治三十年（一八九七年）、京都帝国大学として創設。

石川日出鶴丸
明治十一年（一八七八年）～昭和二十二年（一九四七年）。当時、京都帝国大学大医学部教授。生涯を生理学、及び、針灸の普及に捧げる。戦後、GHQが出そうとした「針灸禁止令」を阻止した。

京都生まれ、信濃町育ち

京都の加茂川のほとりで生まれたの。でも、その記憶は殆どないわね。大正六年七月二十八日、真夏に生まれたから夏子っていう名前。そして記憶にないくらい小さいときに東京に来たの。最初は信濃町の貸家、今の慶応病院のすぐそばに住んだのね。

私は、お母様が二十一歳か二十二歳の時の子供だったのよ。お父様は六つ離れているから二十八歳ね。お母様のお兄様と、お父様がお友達だったので、幼馴染か何かで知り合って結婚したみたい。

お父様は当時、京都帝大を卒業したあと、そこで研究活動をしていてね。お父様とお母様の故郷は岡山の新見なの。幼馴染の恋愛結婚だったのよね。

お父様は岡山から京都帝大に行って、卒業してから生理学教室の石川日出鶴丸先生の下で基礎医学を勉強したの。でもその研究の過程で、恩師の石川日出鶴丸先生が唱えていらした神経の減衰学説をひっくりかえして、不減衰伝導学説っていうのを唱えてね。一躍有

神経の減衰学説
神経を伝わる興奮は、非正常時（麻酔時など）に減衰（興奮の伝わりが徐々に弱まり最後には消滅）するという説。明治十四年頃から唱えられ、当時の生理学の常識として定着していた説。

荒木寅三郎
慶応二年（一八六六年）～昭和十七年（一九四二年）。生化学講座の先駆者。岡山の第三高等学校医学部教授、京大医学部教授、京大総長を歴任。

北里柴三郎
嘉永五年（一八五三年）～昭和六年（一九三一年）。ジフテリアの血清療法を発表し、その功績により一九〇一年の第一回ノーベル賞候補となる。

名になられたの。その説のほうが正しいって。

そして慶応大学が創立六十周年の記念に医学部を作るからっていうので北里柴三郎先生に呼ばれたの。京都帝大総長の荒木寅三郎先生が、師に歯向かう気骨のあるやつがいるっていうので推薦状を書いてね。その手紙を最後までずっと大切に持っていて見せて貰ったことあるわよ。それがきっかけで信濃町に住むようになったの。

そして、北里柴三郎先生にとてもよくしていただきながら研究に没頭して、不減衰伝導学説っていうのを完成させたのね。世界中がずっと減衰って思っていたから、日本では最初全然受け入れられなくて、苦労したみたいよ。

子供の頃の思い出

関東大震災はちょうど六歳の時だったわね。信濃町のおうちと慶応病院の間に、野崎さんっていう子爵かなにかの裕福なおうちがあって、そこの広々したお庭にみんなで避難したの。揺れた時は全

加藤元一
夏子の父。明治二二三年（一八九〇年）～昭和五四年（一九七九年）。神経の不減衰伝導学説の提唱、単一神経線維の剔出実験の成功などの実績を残す。ノーベル生理学賞の候補にもあがった。

朝鮮人虐殺
関東大震災後の混乱時、朝鮮人が「井戸に毒を投げ入れた」などのデマが流れ、多くの朝鮮人が虐殺された。

然覚えてないんだけど、嬉しかったのは、テントかなにかに何日か寝泊りして、それが面白くてね。そこではしゃいじゃって怒られたの。幼い子供だったから何もわかっていなくてね。いろんなテントの子供さんたちとお友達になって、嬉しくてはしゃいだの。家には揺り戻しがあるからって、戻っちゃいけないって。でも、家は借家だったけど、潰れなかったからそのうちまた戻ったわね。

その時、朝鮮の人たちがこの機会に暴動をするっていう噂があってね。そんなことも本当はなかったんだけど、警防団っていうのが各町内にあって、そういうことがあったら、竹やり持ってなんとかしようって話があったわね。大人たちがそういうお話しをしていたのを、聞いてたのだけは覚えてる。でもそれも流言飛語でね。結局何もなかったわね。

信濃町あたりはそんなに家も潰れなかった気がするわね。火事があったのも、広い庭にいたからわからなかったし。

五歳の時に、妹の芳子、よっちゃんが生まれたの。そして私が七つの時に弟の暎一、坊やが生まれたの。弟のことは幾つになっても

「坊や」って呼んでたわね。

小さい頃は、ワカメ売りが怖かったわね。地方のワカメを籠に入れて売りに来たおばあさんがいるの。それで、悪いことをすると、あのワカメ屋のおばあさんに籠に入れて連れていかれるって言われてて、とにかくそのおばあさんがくると逃げ回ってたのを覚えているわ。おまわりさんより怖かった。今はないけど、菅笠かぶって、顔を手ぬぐいで巻いて、大きな籠を抱えながら「ワカメはいかがですかねぇ」って来るの。そんなこと嘘に決まってるのに、信じちゃって怖くて怖くてしょうがなかったわね。

お父様のお見送り

お父様はお弟子さんを連れて、自分の学説を唱えるために、外国にも行かれるようになったのよ。日本ではなかなか認められないからって、スウェーデンだとか、ドイツだとか、ロシアだとか。あの頃は、外国に行くなんて大変なことでね。それで、東京駅を発つと

加藤先生の凱旋を伝える当時の新聞記事

きには、「加藤先生、万歳！万歳！」っていって、慶応の人たちが何十人も来てお見送りするの。お見送りの人の為の受付までできてたのを覚えてるわよ。まるで兵隊さんを送り出すみたいだったの。

それで、私はお父様が大好きだったし、「夏子がお見送りに来るのはいいけど、お父様、行っちゃいや、行っちゃいや、って泣かれるのが辛かった」ってあとで言ってたわ。お迎えの時も、東京駅で受付ができて大変な騒ぎだったのよ。東京駅からは横浜か神戸に出て、船で行ってたんだと思うけど。ヨーロッパにはロシアをシベリア鉄道で横断したり、インド洋の方を船で廻ったりしながら、一ヶ月くらいかかったらしいわよ。

その船の名前、覚えてる。太陽丸とか、サイゼリア丸とかっていう名前だったわね。後になってから、太陽丸のクリーニング屋さんだった女性の妹が、加藤にお手伝いさんとして来たのを覚えているもの。キミヤっていう名前の方よ。

だから外国にいらっしゃる度に、そういう凄いお見送りやお迎えがあって、外国で認められた不滅衰学説で、日本や慶応の名前を上げていったの。そして、日本でも認められるようになって、帝国学士院賞をいただけるようになったの。

小学校はボロ学校

私はね、最初四谷第二小学校に行ったの。その頃、四谷第六小学校っていうのが近くに新しく出来てね、最新設備の小学校だったの。それで四谷第二小学校からも、生徒が少し四谷第六小学校に行ったのを覚えてるわ。「第二小学校ボロ学校、入ってみてもボロ学校」ってへんな歌があったわね。でもそのボロ学校でも優秀な生徒はいっぱいいてね、女の子はお茶ノ水だとか、四中とか六中とか、優秀な

四谷第二小学校
当時の正式名称は四谷第二尋常小学校。現在の左門町にあった。明治三十三年（一九九〇年）開校、昭和二十二年（一九四七年）に現四谷第六小学校に統合。

ところに進んでいたわね。せっかく一生懸命お勉強したのに、戦死された方もいたのは残念だけど。

私は男女組っていうのにいてね、津田さんっていうこっちから勝手に素敵だなって想ってたボーイフレンドみたいなのがいたのよ。私が一方的に想ってただけだから、向こうがどう思ってるかわからないわよ。

男の子と仲がよくて一緒にドッチボールとか、やってたわよ。広くもない校庭だけどね。それから男の子たちは剣玉をしてたけど、それは私はやらなかったわね。でも、女の子らしい遊びはその頃はあまりしなかったわねぇ。

一年生から四年生まで、中嶋先生っていう先生が担任だったの。それで、思い出深いのは、さつまいもの静物画の授業があって、みんな家から持ってきてそれを描くのよ。そしてその後、ふかしてみんなで食べるの。私はおさつが大好きだったんだけど、その時ちょうどお腹をこわしていて、食べちゃダメって言われて。岡山からお母様の妹の春子おばちゃまがちょうど来ていて、その春子おばちゃまが学校に来て、中嶋先生に言ってたのを今でも覚えてるわ。食べたかったわねー。小学校の二年か三年だったと思う。

あとね、お母様がデパートが好きで、ほてい屋（現在の伊勢丹）によく行ってたの。それで学校から帰ってきてお母様がいないと、今の新宿通り沿いにある文展堂っていう本屋さんまで行って、ずっと立ち読みしながら次の都電かな、次の都電かな、って待ってたの。他にすることもないし、お母様のことが本当に大好きだったのよ。

雙葉小学校に編入

四年生の時に編入試験を受けさせられて、四谷の雙葉小学校に五年生から行くようになったの。先生に質問されて手を挙げるとき、みんなはお行儀よく「はい！はい！」って手を挙げるんだけど、私は第二小学校の癖が出て「先生！先生！」って手を挙げて、それが有名になっちゃって。めずらしかったんじゃない？　お友達は簡単にできたわよ。こういうたちだからね。

伊勢丹とほてい屋
老舗百貨店ほてい屋は大正十五年（1926年）に新宿、現在の伊勢丹の東南角部分に店舗を持ち営業していた。その後、昭和八年（1933年）、伊勢丹が新宿に本拠地を移し、ほてい屋を囲むように店舗を建築。昭和十年（1935年）、伊勢丹がほてい屋を吸収合併したことにより、ほてい屋店舗を壊し、伊勢丹店舗を増改築して現在に至る。

雙葉小学校
明治四十三年（一九一〇年）創立。当時は雙葉女子尋常小学校。初代校長メール・テレーズが私財を投じて、現在の地にフランス風の優雅な木造二階建て校舎を建築。

雨天体操場っていうのがあって、体操していると寄宿舎からお食事の準備をしている匂いがしてくると「いいなぁ」って思ってたのよ。ほんと、その頃は食べ盛りだからね。

それから、雙葉はみんな幼稚園から英語があるんだけれど、私は五年生に編入して初めて習うでしょ。だから一生懸命勉強したわよ。でもだから今でも苦手なの。結婚した後におじいちゃま（夫、冨田恒男）から「お前、雙葉の英語、雙葉の英語、っていうけど、全然ダメじゃないか」って言われたのを覚えてるわよ。

好きな科目はそうね、あの頃暗算が得意だったわね、でも、応用問題はダメだった。あと、歴史が好きだった。だからって、成績は真ん中くらいなもんだけどね。にぎやかに手を挙げたりするのは「加藤さん」っていうので目立ってたけど。いつも大きな声でおしゃべりしてたから、おしゃっぴーってことで有名だった。頭が良くて有名じゃなくてね。

それから、オルガンを小学校の小さいときから習っていたんだけど、お父様が外国に行ってグランドピアノを買ってきてね。大きなグランドピアノが貸家の右京町の応接間に置いてあったの。今考えると、よく入ったわね。で、よっちゃん（妹）も一緒に習ってたんだけど、優秀でね。私は全然ダメだった。二人で連弾をするんだけど、よっちゃんの方が難しいパートを弾くの。坂野敏子先生っていう方に習ってたんだけど、私、夏子の方はもうさじを投げた、妹の芳子の方は私の手に負えないからって、ロシア人のビノグラフとかいう先生を紹介するって。姉妹なのに凄い差でしょ。私は練習もさぼって、お茶菓子が出そうな頃になると戻ってくるの。その後、よっちゃんは横浜でリサイタルまでやって、最後はピアノの先生やったものね。

よっちゃんも最初はボロ学校に通って、途中から雙葉小学校に転入したわね。弟は最初から慶応の幼稚舎に行ってね、都電の七番っていうのがあって、品川行きのに乗って行ってたわね。もう一つ、三十三番っていうのがあって、古川橋の方に行くのがあったわね。今の外苑東通りを通っていて、それに乗って行ってたわよ。四谷三丁目の交差点のところが終点だったの。

雙葉女学校
明治四十二年（一九〇九年）
創立。当時は雙葉高等字学校
が正式名称。

女学校時代

そしてそのまま、雙葉の女学校に行ったの。女学校時代に一度、お父様が雙葉に呼ばれて来て、講堂で講演したのを覚えてる。生理学のお話か何か、中身は忘れちゃったけど。

遠足は鎌倉とか江ノ島とか、そんなに遠くには行かなかったわね。千葉の方も行ったけど、関東地方から出なかったわ。女学校全体で遠足に行くのよ、五学年全部で。一クラス五十人で、一学年二クラスでしょ、だから五百人で行ったわね。もちろん修学旅行は学年ごとよ。京都だとか奈良だとかに五年生の時に行ったわね。汽車で一週間くらいかけて。

それから雙葉は東宮御所や迎賓館の近くだったから、国賓の方たちが来ると、四谷見付の交差点まで出て、みんなで日本の旗を持たされて振ったわねぇ。誰に向かって振ってるんだか全然わからなかったけど。

あと雙葉はフランスの宣教師が建てた学校だったでしょ。だから、語学は英語かフランス語かを選ぶんだったけど、もちろん私は英語。ただ、フランスの国歌を意味もわからないまま覚えさせられたわね。それで、何か式典があると、フランスの国歌を歌ってから、君が代を歌ったりして、こんちくしょうって思ったり。

それから、お御堂っていうのがあって、テストの前にだけお祈りしていい点下さいなんて言ってね。でも、点数が悪いと、報告にはいかなくちゃいけないんだけど、やっぱりこんちくしょうよね。

当時の娯楽は映画と宝塚ね。もうみんな宝塚に夢中で、先生が突然教室に調べに来るのよ。机の中とか。それでみんな写真を持って逃げるの。見つかると取り上げられちゃうから。芦原邦子とか、天津乙女とか、その姉妹の雲野かよ子は人気だったわね。でも、私はそんな他の人たちみたいにめちゃくちゃなファンではなかったし、写真も持っていなかったけどね。時々、お友達と宝塚を見に日比谷まで行ったわ。映画よりも宝塚の方が私たちの間では人気だったわね。

六大学野球
早稲田・慶応義塾・明治・法政・東京・立教 の六つの大学で構成される野球リーグ。大正十四年（一九二五年）発足。

職業野球
現在のプロ野球。昭和九年（一九三四年）、アメリカのプロ野球と対戦するため大日本東京野球倶楽部（現在の読売巨人軍）が発足し、職業野球の歴史がはじまった。プロ野球と呼ばれるようになったのは戦後。

山本忠興
明治十四年（一八八一年）～昭和二六年（一九五一年）。昭和四年（一九二九年）、プロジェクション型の早稲田式テレビを発明。

六大学野球の全盛期

そして女学校時代は野球が人気があって、野球をみんなでやったの。雙葉の校庭で体操の時間にやったのよ。水野先生っていう、体操の先生が、女学校時代ずっと受け持ちの担任の先生だったの。

野球といえば、お父様が当時慶応の野球部長、応援部長をやっていたから、うちに野球部の選手が遊びにきたのよ。その頃慶応は強かったたのよ、六大学で。ファーストの立石、セカンドの本郷、サードの水原、ショートストップが川瀬とかいって、ピッチャーが宮竹。センターは楠見っていうのがいて、私の三つくらい上の雙葉の先輩が、その人と結婚したわね。あの頃、本当に有名な選手たちで、職業野球も何もなかったから、六大学野球は盛り上がったわね。

そんな選手たちがみんなうちに来て、勝ったとか負けたとかを報告するのよ。早慶戦なんかでは、慶応が勝つと早稲田の応援部長がうちにご挨拶にいらっしゃるの。こっちが負けると行くんだけどね。早稲田の応援部長は応用科学の山本教授で、当時まだテレビジョンなんてなかったけど、将来そういう時代がくるっていって、何かその立ち上げに関わったみたいよ。

そんな有名な選手たちがうちにくるから、お友達からはサインを頂戴ってねだられてね、サインをかわりに貰ったりして、そんなので私は少し自慢だったわね。それから早慶戦の切符も何枚か手に入るでしょ。そうすると受け持ちの水野先生なんか、切符を何枚か譲ってもらえないかしらって私に言ってくるの。それでお父様の機嫌が悪いと「うちはダフ屋じゃないんだ」って言われて。でも、結局娘がかわいくて、下さってたけどね。

女学校の三年かなにかの時、借家を出て、千駄ケ谷に大きなおうちを建てて引っ越したの。戦争で焼けちゃったけど、千駄ケ谷の二百坪くらいの土地で、お庭が半分くらい。二階建てで、ちょっと自慢できるくらいの大きなおうちだったわね。そこに野球の選手たちが訪ねてきてたの。お手伝いさんは三人いたわね。でも車はなかったわね。やっぱり自家用車は高価だったのよ。

でも、お手伝いさんはいたけど、お母様は綺麗好きで、よくお掃

デイビット・カパフィールド
英国の文豪、チャールズ・ディケンズ（一八一二年～一八七〇年）の小説。その他代表作に「二都物語」「クリスマスキャロル」などがある。

除をしていたわね。最初に京都で暮らしたときの大家さんが、綺麗好きな人で、そこで鍛えられたみたい。当時は京都帝大の助手でぴーぴーだったから、狭いところにに住んでいてね、綺麗にしなくちゃダメだったみたい。だから大きなおうちに住んでも、「加藤さんのお宅は、縁の下まで綺麗ですね」って言われたわね。

許婚が現れて

ちょうど女学校の四年生の時、そう、十六歳の時に許婚のお話が急に出てきたの。お父様がご自分のお弟子さんの中から心遣いしてたんじゃないかしら。

ある日突然目の前に現れたのよ。それで、家庭教師みたいに、英語を教えて下さったり、絵の宿題が出ると全部描いてくださったり。おじいちゃま、絵が上手だったのよ。英語も難しいものを手伝ってもらったの。「デイビット・カパフィールド」なんていう小説の宿題なんて出てね。九つも歳が離れていたから、すごいおじいさん

ゲイリー・クーパー
一九〇一年―一九六一年。米国モンタナ州出身の俳優。「真昼の決闘」などで二度のアカデミー主演男優賞に輝く。

フレデリック・マーチ
一八九七年―一九七五年。米国ウィスコンシン州出身の俳優。「ジキル博士とハイド氏」などで二度のアカデミー主演男優賞に輝く。

のところにお嫁に行くような感じだったわ。それに、私は外国の映画に出てくるようなハンサムで背の高い人と結婚したいと思ってたの。でも、背は私とあまりかわらないし、すごい年上でしょ。ゲイリー・クーパーとか、フレデリック・マーチとか、そんな感じの人と結婚できると思ってたのよ。今考えると、よっぽどおてんぱーだったのか、お姫様のつもりだったのかなんだかわからないけれど。ほんと、ばちが当たるわね。

私は、おじいちゃまとデートなんかするよりも、一緒にいることで食べられるお食事の方が嬉しかったのよ。くいしんぼうだから。大森にあった澤田屋っていう有名なカニ料理屋さんで、家族もみんな一緒でお食事をしたのを覚えてるわ。それが婚約のお食事会だったのね。他にデートは映画に連れていってもらったりもしたけど、まだ私は学校があったから、デートばっかり行っていられないでしょ。おじいちゃまと行く映画は洋画だったわよね。

女学校では、許婚がいたことなんかは秘密でしたよ。だって、それがわかっちゃうと、絵なんか描いてもらってるのにばれちゃうで

しょ。英語だってそうよ、教えてもらったあんちょこをそのまんまに授業で発表したあとに、「お友達からこの単語なんていうの？」て聞かれちゃうとわからないの。おじいちゃまは代官山の当時の同潤会アパートが寮で住んでいて、そこによく宿題を教えてもらいにいったりしたわね。でもそんな風におじいちゃまにはお世話になってたのに、背が低いだの文句ばっかり言って。

それに比べて、お父様とお母様はおじいちゃまのこと大絶賛だったのよ。それであるとき「そんなに好きならお母様が結婚すればいいでしょ」って生意気な口を聞いたの。そうしてからはじめて、チケットをもらって、宝塚におじいちゃまと一緒に行ったときに「加藤様、加藤様、至急ご自宅にお電話下さい」って公演中に放送が流れたの。それで慌てて、家族が倒れたんじゃないかって電話をしにいったら「あなたがあんまり生意気だから、驚かせようと思ったのよ」ってお母様が出たの。私はよっぽど生意気だったのね。そんな事件もあったわ。

でも、おじいちゃまはね、婚約の前に私にこっそりとおっしゃったの。「僕は学者で地味だけれど、ノーベル賞は無理だとしでも、頑張って学士院賞を取るから」って。それで四十年後に本当にお取りになったからね。私はばちがあたるわね。

そうやって女学校を卒業して、同じ年の十一月、昭和十一年に十九歳で結婚したの。

聴き手：冨田直子

聴き取り日：平成十八（二〇〇六）年七月三十一日

活動報告

「北方領土の記憶」聴き取りイベントの開催

日本財団様の助成を受け、北方領土の元島民の方々の聴き取りイベントの準備を進めています。九月一八日の敬老の日、北海道根室市の北方四島交流センター「ニホロ」にて開催する予定です。

元島民の皆さんの平均年齢は七四歳。島で暮らした思い出も風化の一途をたどっています。今回のイベントがこうした流れに一石を投じるものになればと考えております。

納沙布岬より北方領土を臨む

濱栄子さんとの聴き取りの様子

濱栄子さんの聴き書き

会員の許斐（このみ）健太さんは出版社で雑誌の編集者をなさっています。三年前に、NPO「昭和の記憶」を知り、以来私たちとともに活動してくださっています。その許斐さんから「祖母の聴き書き本を作って欲しい」という依頼を受けました。

そこで、許斐さん、盛池代表、冨田理事の三名で、二月下旬、二日間――一日目に約二時間、二日目に約四時間お話を伺いました。

その後、テープ起こし、編集を進め、『気楽なもんですよ』というタイトルで完成させることができました。

『気楽なもんですよ』というタイトルですが、実際の濱さんの人生はけっして「気楽」

ではなかったことは一読していただければおわかりになるはず。

本書をお求めになりたい方は、事務局へご一報いただければ頒布いたします。

「上越・昭和の記憶」連載

NPO「昭和の記憶」は新潟県上越市に支部を設けております。昨年は、子供たちを集め、「平和学習会」を開催するなど意欲的な活動を行っています。

新潟支部での活動として、地域紙「上越タイムス」で連載を持つことになりました。

タイトルは、「上越・昭和の記憶」。写真とエピソードを紹介するコラムです。おかげさまでご好評をいただき、読者の方より共感の声が寄せられています。ホームページでもご覧いただけますので、ぜひご覧になって下さい。

上越・昭和の記憶　第一回
（二〇〇六年五月二十四日「上越タイムス」掲載）

「駅の記憶」連載

インターネットの乗り換えポータル大手「駅前探検倶楽部」との共同事業として、「駅の記憶」を開催しております。「駅の記憶」とは、駅の古い写真などを展示し、そこに思い出などをお寄せいただくという形式の展示です。

第一回の下関駅を皮切りに、毎月一日に、上野駅、熱海駅、鎌倉駅、宮崎駅、軽井沢駅、札幌駅の展示を行って参りました。今後も新宿駅、京都駅、青森駅などを紹介して参ります。左記URLでぜひご覧になって下さい。

http://ekitan.com/kioku/

仙台からの夜行列車で上野駅へと降り立つ人々

いにしえ写真館～札幌駅～

▲終戦後間もない時期の札幌駅（昭和 26 年）

明治開拓期の開業以来、北海道交通網の中心として、今もなお重要な役割を果たしている札幌駅。

航空機旅行の低価格により、昨今では東京―札幌間の旅客利用者数は、航空機が鉄道を上回るようになったものの、旅行といえば鉄道旅行が当たり前だった時代には、本州方面からの旅行者の多くが、札幌駅のホームに降り立ちました。

今回は、北海道交通網の中心としての、また、多くの旅行者を迎え入れた北国の玄関口としての札幌駅の歴史を写真と共に振り返ります。

▲明治 15 年に改築された二代目の駅舎（昭和 11 年頃）

▲札幌駅に乗り入れた定山渓鉄道（昭和 31 年 8 月）
定山渓温泉の発展と共に業績を伸ばすも昭和 44 年に全線廃線に。

▲昭和 55 年頃の札幌駅ホームの売店

▲札幌駅立売商会の売り子さんたち（大正期）

写真提供：札幌市文化資料室

▲昭和 34 年頃の 3 代目駅舎

▲昭和 54 年の札幌駅。駅舎に掛かった垂れ幕から、スキーヤーのための旅行パックがすでに当時からあったことが伺える。

書評

◎「松本清張と昭和史」保阪正康

保阪正康さんには、会員の許斐健太さんのご紹介でお目にかかったことがあります。聴き書きの大先輩として尊敬申し上げていたので、とても刺激なった印象深いひとときでした。

保阪さんといえば、二年前に第五十二回菊池寛賞を受賞されました。長年に渡る聴き書き活動が評価されたのです。たいへん喜ばしいことです。

昨年の戦後六十年を期に、いよいよ旺盛な執筆活動を展開される保阪さん、新聞紙面や雑誌などで記事や書評をよく目にするようになりました。今回は保阪さんの近著、『松本清張と昭和史』（平凡社）をご紹介します。

本書は、松本清張の名著『昭和史発掘』の解題という位置付け。私が初めて『昭和史発掘』を読んだのが大学に入ったばかりの頃、ちょうど昭和史に興味を持ち始め、祖母を相手に聴き取りを始めた時期です。

芥川龍之介の自殺、二・二六事件、下山事件――これまで歴史の一コマとして、教科書に記されている事件の背後にある闇の濃さに

『松本清張と昭和史』
（保阪正康著 / 平凡社）

慄然としたことを思い出します。

今回、本書を読みながら、清張の描いた生々しい現代史は、その後の私の歴史観に大きな影響を与えたことがよくわかりました。

『昭和史発掘』は大著です。まずは『松本清張と昭和史』をお読みになるのをお薦めします。（盛池）

『昭和史発掘』
（松本清張著 / 文藝春秋）

◎「地下鉄（メトロ）に乗って」浅田次郎

私の生まれ育った土地には、地下鉄がない。だから、上京して初めて乗った地下鉄は、私をとてもわくわくさせる乗り物だった。浅田次郎がこの『地下鉄（メトロ）に乗って』で描く現代と昭和初期の風景。その二つをつなげているのが地下鉄だ。

主人公・真次は、大財閥・小沼佐吉の次男坊。父とことあるごとに対立していた兄は、ある夜、地下鉄に飛び込み自らの命を絶ってしまう。そして今、父の肩書きの恩恵は受けずにしがないサラリーマンとして生きる真次は、地下鉄の通路を使って様々な時代にタイムスリップするようになる。

「もしかしたら、兄を救えるかもしれない」、

そんな期待を持ちながら――。

最初に真次がタイムスリップした先は、約四十年前。「祝・東京オリンピック」の横断幕が掲げられていた時代だ。そしてまさに、真次の兄が父と口論になり、飛び出していったその夜だった。

タイムスリップを繰り返すうち、真次は過去の世界の人物と言葉を交わすようになり、ついに真次は父・佐吉の当時の姿を見つける。成功者として名をはせた佐吉であったが、真次はその青年時代を垣間見ることで、今まで知り得なかった父の姿を知ることになった。そして、その姿は夢と希望に満ちあふれた、純粋で爽やかな若者の姿であったのだ。聴き取りを通じてその方の来し方を知るとき、どの方にも青年時代の佐吉のように、夢あふれる初々しさを感じるのは、私だけだろうか。（わぐり）

『地下鉄に乗って』
（浅田次郎著 / 講談社）

◎「ALWAYS　三丁目の夕日」

昨年末から今年にかけて、大ヒットとなった映画、「ALWAYS　三丁目の夕日」。日本アカデミー賞の最優秀賞十二部門を独占したことは皆様の記憶にも新しいでしょう。

昭和三十三年の東京下町を舞台とした、夢と希望に溢れた時代を、人情味溢れる夕日町の住人の暮らしを通じて追っていきます。

この昭和三十年代を創り上げたのは、戦争を生き抜いた明治、大正、昭和初期生まれの世代です。映画を見終わって、なんともいえない心の暖かさを感じ、あの時代の気持ちをもう一度取り戻したい、と思う。でも、今と決定的に違う「何か」がそこにはあります。

それは当時の大人、一人一人の心に残る「戦争」。「戦争にも行っていないくせに」と鈴木オートが叫ぶシーン。空襲でご家族を亡くした宅間先生の深い悲しみ。現在の延長線上の人情ドラマと思って見ていると、突然パンチをくらわされます。

国民の一人一人が本当の意味でのいのちの大切さや、人と人の繋がりの大切さを知っていた。それがあの時代にブレンドされ、あの時代の深みとなっているのです。

昭和三十年代を創った上の方々への聴き取り活動を通じて、夢と希望と暖かさの原点に、少しでも触れたいと思う毎日です。（冨田）

『ALWAYS　三丁目の夕日』（DVD）
原作：西岸良平「三丁目の夕日」（小学館）
監督・VFX: 山崎 貴
脚本：山崎 貴、古沢良太
出演：吉岡秀隆，堤真一，小雪，堀北真希 他

編集後記

今回、この季刊誌の編集を初めて担当しました。あちこちに迷惑をかけながら、何とかこうして形にすることができ、ほっとした気持ちが半分、次のことを考えると不安な気持ちが半分、というのが今の偽らざる心境です。

最後までお読みいただいて、如何だったでしょうか。ご感想はもちろん、ご意見、お叱りでもお寄せいただけると嬉しいです。

今回は、季刊誌の編集が初めてだったこともあり、お恥ずかしい話ですが、完成させることだけで精一杯だったので、皆様からの客観的なご意見はやはり気になるところです。皆様からのご意見、ご指摘を、次回の季刊誌発行に活かして善処していきたいと思います。（お）

私は同席できなかったのですが、先日、松本零士先生の聴き取りを行いました。聴き取りの様子は、本誌でご覧の通り、とても興味深いものでした。ところが、それと同じくらい驚いたのは先生の人となり。まずはお家。門を入るなり、いきなり「銀河鉄道９９９」のメーテルの等身大像が！

また、先生は物に愛着（執着？）を持たれる方のようで、かつて住んでいた家が解体されると聞くと柱を一本もらってきて、家でしっかり保管されるのだそうです……。このあたりの雰囲気、エピソードを聴き取りの記録にどう表現するか――これが私の目下の懸案です。（せ）

別データ挿し込み

特定非営利活動法人「昭和の記憶」

私たちは、高齢者からの聴き取りを行う特定非営利活動法人です。活動目標として、次の５項目を掲げております。

1．高齢者の記憶を収集・編纂し、後世に残す
2．子供と高齢者の世代間コミュニケーションを促進する
3．聴き取りを通じて、地域コミュニティの活性化を促す
4．高齢者への尊敬の念、活性化を促進する
5．子供の歴史・地理教育、聴く力の涵養を促進する

私たちの活動は、聴き書き出版（聴き取り内容を出版物にするサービス）、会費収入などを経済基盤にして運営されております。皆さまからのご依頼、ご支援を心よりお待ち申し上げております。

また、いっしょに活動してくださるボランティア・スタッフも随時募集しております。詳しい情報は、ホームページ、パンフレットに記載されておりますのでご覧下さい。

〔本部〕
東京都千代田区神田神保町 3-6-6 九段アビタシオン 303（〒 101-0051）
電話：03-3230-8644　ファックス：03-3267-5682
メールアドレス：admin@c22.jp
ホームページ：http://www.memory-of--showa.jp
〔新潟支部〕新潟県上越市南高田町 4-23
〔山梨支部〕山梨県上野原市上野原 661-4

季刊 市井の昭和史
聴き取り活動の記録

「昭和の記憶」ブックレット No 5

発行日　平成 18 年 10 月 1 日
発行所　NPO「昭和の記憶」
発売所　株式会社日本図書ライブ
印刷所　株式会社平河工業社